いろ〳〵御物語なとあり儒者佐々木育助樂人辻左近將監諸大夫中沼大和守坊官二條宰相其外〻もの共數輩出てとり〳〵其場〻世話いたし民藏等か前にも人々壹貳人宛始終つきいて取もつなりこの中沼大和守といふは元來一乘院宮に諸大夫なかりしに近衞殿の諸大夫たりし大和守か先祖を御借用ありしか濫觴にて所々の御室諸大夫出來候故大和守家を以門跡方等〻諸大夫〻元祖也とこゝにてはいふ也詳なることはしらすさて御宴なかはなるによつて左近將監朗咏をうたふ儒者育助三體詩をうたふ宮も興かり給ひて樂の賦にや拍子にや何とやらむチフラウラといふことを御うたひある御近習等にも和したてまつるものあり民藏ははしめ富士講巡禮歌の類かとおもひあやまりしといひきかれか耳なれぬにはさしてしひこゝもいひかたしこのチウラウラ〳〵何とかいふことは三弦の手ならはツヽテレ〳〵といふ口三弦の類かもしらねとも平服して宮の遊はすうちは聞居れはちと上野の御法事のことおもひ出るはかりなり絲竹のことな

らぬときはこれをは遊はすことのよし也これは　大宮御所の重き御所勞のこと内より申遣せられたれは今一たひの御ふみにて御出京のつもりはや御供の御したくなとうち〳〵はありし故と聞ゆる也道中三日切にゐ御内々春日へ御祈禱申來りしことも外にありきつかはしきことなと御物語ありきいつ方の御事にや　大宮御所の御ことゝもきこえさりき一昨日は御先格〻由にゐ圓照寺の御所に被召又今日は御目通被仰付御叔姪の御懇蒙ること難有中宮寺宮も御妹君にて被爲渡るゝ所御目通せし宮の御一類にて大和はみな御かため被遊けると申上けれは宮御機嫌にてわか實家は吉野の　皇居の血筋なる故かことに盛にして當時は　禁裏も　後醍醐帝の御血筋近衞も鷹司もみなわか實家のもの共かつきたり不思議なることよと御意也こゝろの内に　御神のいかに思召けむ天つ日の神の御はからひ人力ならぬことゝ足利家のむかし等おもひ出たり竹の子羹給ひしによりて竹の事御尋ありしかは孟宗の名のことくこの竹はもと日本の物なら

すことに近きものにゐ關東へ被行は五十年前はかりのことにて元來眞竹といふものも吳竹から竹といひ西の國のものゝわたり來りしにて日のもとに昔より有しは俗に女たけといふ皮ある竹にてかはたけのうきふしなといふ則女たけのことなるよしなと御答申上き宮御歌よりもいにしへのならの京の御はなし御好にてよく夫等の御物語ある也御前を下りたれはよはいたく更たり

○十三日　雨　六十度のさむさ也この頃暖氣にてかうろきは更也かねたたきなとよるよくなく也くものの巣なと少もかはらす

○十四日　時雨　文照院樣御位牌所中院屋ゐ參拜○この頃一乘院宮の御はなしに左衞門尉はこの頃山村へ行しとき　圓照寺宮は山村の御所と申尼の外に毛のある女二輩をみしならめあれは實家のものにて姪につき添て來りしか今日は上京したり姪か尼共の手にてよくなしみけれとも夜半しゝのときなれし女の居らねはむつかるといひしと仰られき伏見宮の御息女にても四才に被爲成れははや左右ともしらぬ尼らか手にひとゝなり給ふ也圓照寺宮は御所号のことく山村にて我らさへに山さといかにおもひきゆらむといひしはかゝる所なるへしとおもひし所故挨拶にも既に尼僧等へ京かたの上臈衆はさそ御さひしからんなといひし位の所なるに四才の宮の知らぬ人手にゐ御成生ましますことをおもへは太郎なと母上くれ〳〵嚴敷御取扱あるへし孤臣蘖子の大業を成も幼年より多せしくろうの藥になる故なるへし四才の宮の御おとなしきことを榮女か聞てわれと御同年なりわれもおとなしくするとてまねひ奉るとて染かわらひし也榮はこの頃古今集の序文に百人首位は少々よみ習ひし也

○十五日　時雨　去ル十三日夜　大宮御所のかくれさせ給ふよしきのふのくれに所司代より申來れるによりならは五日の間鳴物普請とも停止の旨觸させたりよつてけふは月並の禮なし○きのふ御役所は休なれはとて順作は打つるゝ友もなくたゝひとり時雨をおして立田川のもみち見に行

たり從者に一瓢の酒一裹の筆墨を携させ行てたのしみかてらかしこの眞景うつさむとの事なりきけふきくにならより三里にたらすして立田明神にまいりぬこゝにかなりの町あり酒肆旅店ありてことかくことなしこの節のもみちともにちら〳〵と遊歷の人或は近きわたりのものもみち見に來れるに逢ひしと也立田川といふはいにしへのうたによみしはあせはてゝ今は立田明神のほとりなるはつか三四間はかりなる小川にもみちを河邊つたえに六七十本もうゑありこれはいにしへのなこりをみせむとてこゝろなきものゝ川邊へ只植に並木となせしにて半點の風流もなしそこの兩山そはたちしは立田山也と茶店の翁はいひき其間より川の流れいつれは流をさしはさみもみちをは植はけしきのあるへきをそれらのことも心なき田夫らか只一ならへにうゑしなりとて空しく筆墨をもち歸れりといひきわれよつておもふは聖人のみちといふも只昔のことのなこりはかりにて夫を村學究か私意を加へて徒に講したらむには僧侶か法をとくには遙におとりてこゝろあるものは興さますことならむか立田のもみち夫に似たりされ共田夫野人らかうゑしにてももみちのあれは風流人も行なりいにしへの姿絶なはたれかは山村へ行向ふへき又それによつておもへはいかに村學究らなれはとて其人の學を講すれは聞人もあり書物をみる人もありて其内にはよき人も出來らむかさらは村學究なりともなきよりはよかるへきか今ならの學文甚立田のもみちに似たりと感激せしこと也

○十六日　晴　さむしいまた氷はなし○大坂御城中にゐ大番組頭を大番の人切殺して切腹せむとせしを相組の人組とめ右にゐ大さわきのよし風聞也○過日ゑ出火附火のよし風聞あり奉行所近邊のこと殘念に付いろ〳〵を手をつくし聞しに奉行所ゑたまり番に怪敷ものあり長吏共召捕らむと内々申出しかともいかにも薄きことにゐ手かゝりとはいはれすよつて差留置内に相察して逃たりしからはとて手段して紀州境ゟ召捕來りこゝの風にて直に牢屋敷へ連行て用人立合にて吟味せしに忍入四ケ所と火事の

盗とを白狀したり夫は土藏を破り内のはめを火にゐやき切るつもりなりしか火を吹つけしに内に半帋つみかさねあるに火附きて燃上りゆへいられぬ故に物をも不得取逃しと申せし夫を白狀させし手懸りといふは火事場にやりかんなといふものありしよりのこと也然るに白狀すると右のやりかんなをみせて長吏かこれは汝の道具箱ゑ内よりやさかして持來れりといひしに盗人はそのやりかんなにて東のかたの壁を破り夫を其まゝ捨置歸り手元にあらす必燒失しとおもひしといひし又東のかたにはあらす西のかたを破りしといへは盗賊のいふはいや東のかた也かよふ〳〵と壁を切し方角其外をつまひらかにいふを強ゐ西也と長吏かわきより爭ふ也又土藏ゑ内に羽目板は横にうちありしといふを長吏かわきよりたて也と爭ふ也いかにも不審なることを長吏かわきより云故にのち事果て家來かた其譯を尋ねしにこの賊元來たしか成證なし責問にゐ白狀せしかはわさと事をうら返しにして脇より尋みてその答を以たしかに證をとる也といひしよし其外途中にゐ竹をとり夫を足かゝりにせしといへは其竹のありし町迄人をやり穿鑿する也この吟味の入念おもしろき仕かたには我感心したり關東にはかゝる吟味物なし土地の風俗の細やか成故かいつれにもこれにてはあた落なしたのもしきこと也新右衞門心得のためしるす也

十月十五日の夜かねをかりてかたりしなりけるとて故里のやのあるじ

〇十七日　晴　平山幸藏か若かりし時に雨後のみち半はみつたまりしに行あたりしはし考しか横みちはあゆまずにすか〳〵と參り草履を脱て水たまりの眞中をおしけもなく行しとある人の幼かりし時みしと順右衞門にかたりしと也又伊能一雲先生の御はなしに幸藏とつれ立ある鋏炮場の脇を通しに發炮の聲に幸藏大に驚しかたちまちにヲヽ鋏炮よといひてこゝろを取直して行しを若きときのこと故に可笑ことにおもひ居しかとし老て武のことに心を用ひみるに幸藏か凡庸ならぬことしりきと被申きこれらのこと並々の人の笑ふことにて怠らす工夫するものゝ感すること也氣かつかぬとあさみ笑ひてこゝろあるものにさけすまるゝ也澹臺滅明は

後世のわらひもの孔門の弟子のとる所と楊氏のいひしを集注にあけられしをおもひ出て記す也

○十八日　晴　明日よりは拷問をも仕候積之旨申出る重き御事にゐ京都にゐは　御喪服被爲　召るゝにはつか五日にゐ不苦哉といひしにわれより昨年夫等のことに付申聞たる旨もありしと之事也其書留をみれは關東にゐは鳴物停止中は公事吟味物拷問繩懸等いたし不申候間以後相止可申旨こゝにて鳴物停止中吟味物をする故に爲申聞たるときの覺書也大に驚て解しかたと書留の不宜ことをいひ聞かせ朱書をいれさせて以後わかいひしこと其外書留にこゝろすへきことをいひ聞かせ置たりこれはいひし人のそこに居れはこそかくも申さるれいにしへ大儒先生へ其門弟子か問ひしことをかきつらねたる語類語錄なと其大儒先生を再ひ九源より起し來りて見せたらむにはさそ驚こともあるへきか人に申聞するには其人の病へ對ししるしあるを專としていつれ曲をためて直にすくるの意あるもの也しかるを其まゝに記錄して夫を物さしのことくこゝろ得ては大成相違なりとけふくれ〳〵おもふ也韓非か燕書郢說の歡けにもとおもふ也御仕置の先例を引も平日のことも其心あるへしいふ人も疾なき樣にすへし新右衞門へのはなしをこゝに記す龍介春日山の洞のもみちをみて折來て

水谷川（ミツヤ川春日の名所也）苔の岩かとふみわけて折しこそめの洞のもみち葉

とよみて出せり此男かゝる所をよみしには折々おもしろきふしある也

○十九日　晴　けふは家來共一同劔術遣ひ遣す久しく鑓のすこきなとにゐ試合をせされは十分に遣ふへしと息きれ遣はれぬまてとおもひしか未熟のもの共なれはみな三たひほと遣ひ遣したれは手いたみなといひてやみぬ夫より書物をよみ遣し夜に入四時過まて孫子通鑑なとよみ居しに大にひる汗しことなれは氣血めくりて快然たり稽古着は明朝の用に立ぬほと汗にぬれて夜中巨燵にて女共かほす也けふは少しく酒用ゆるともかな

耶合之燈下にすこしの節のけのきの庭のはもみちすかれつつるる庭の散面に翁さこのひしつらゝ菊の日まとかけかさもすあもの　さかこかるこ虫しのくそ　音のさ水ほ　な　きさ　かの　ひ石　しつ　かれ　ねひ　さに　しふ　池かる　のくあ　霜へた　もつま　こかり　きもふ　もに　しえ　るも　ゝ冬　子庭　日の　尚目　語書　徵論　朱子　子集　十家　文注　集同　孫同

と引はりらむかと四過に其ことおさとに申せしにおさと一壺の酒をもち來れり一盃をのみ一枚の書をよみ古人とはなしするごとくにていと〳〵こゝろよし肴は民藏かくれしあみの鹽から一さらのみ外に物なし夫を湯にいれなとして机上に置書物をさかなに酒のみたり小さなる猪口にゐ七ッと六分目はかりのみしに酒つきたり今少し酒を温めむかといふ故にこゝろよさに酒をのめとも兼ゐもいふことく酒をはいたくこのむものゝいたく又禁するも酒也しかるにこゝろ快然たるにまかせて今夜はおもはす志酒のためにに克ことあたはすして一壺をかたふけし也此上はのますといひしか例の通おさとはわか酒のむことを不好且は深切なる人なれはわかいふにまかせて徹したりこれを記すころは夜いたくふけたりア、江戸にてけふのこゝろもちよきことありて新右衞門來り古今の史を評し治亂興亡を論し忠義の士のことをいひなから涙をぬくひ其度々に一盃をのみ新右衞門に遣し其ことを母上のたのしみにきこし召したらむには仙境の玉の漿にに

國字解鑑
万葉代匠記
同略解

清正は重き甲冑の上に干飯三升金錢壹貫文を被附こし三尺五寸の備前兼光の刀を被指帝釋くり毛と云馬に被乘たるさま鬼神のことくなりと古きものにもみえしかも

もやはかはおとるへきとおもへは忽に慷慨の氣くしけて酒のために一層の故郷の情を發していふへからさるにいたる故に其さまをはなしにかえて卽坐にこゝに記す

○廿日　雨　けふ一貫三百目ある捧をつくれりこれは今までのいやひかたなかるくなりて一かたに千六七はふれる故にひまかゝれは重くして數を減する積り也むかし關雲長の青龍刀は八十二斤ありしとか覺へし今のは十三貫目余也凡やりの目かた六百目前後より重きは別段のもの也凡積今のやり二十二本かけのものを馬上にゐやす〳〵とふりし人なれは人はかりにて驚へき不世出の人也しかるに忠義膽略武勇兼備せし人なれは今の世迄も神にまり（脫アルカ）靈ある筈也日のもとの清正によく似たる人也清正か甲冑干飯錢の目かた夥ことなるへしこの人も万世祭らるへき人也（脫か）○今朝飯田吉助沒せりこれはわか方の中間に以前置しか質直なるもの故に追々と徒士にとりあけて遣しかこの二月の頃より瘡氣にて七月の頃はとてもとお

もひしか醫二人附置藥に力をつくせし故か少しく快成て悦ひし甲斐もあらす九月のはしめよりは介抱人貳人附切にてねかし起しをするわけて當月のはしめよりは與助一人の專引受にて晝夜二度ッゝふくさものゝ洗濯也與助よくこゝろをつくしたり一夜に十六度も吉助に起せられしことありしと也同人病勞していろ〳〵いふにはては困しける躰なりけるか死してみれは介抱の詮なし力おちしといひていたくかなしみ晝夜の看病によほとやせたり深切なること也吉助は能州七郷在の農父也

○廿一日　雨　長崎の組頭幷與力共一同御召返しに成たりとて都筑平藏より土產物なりとて上布のかたひら地來る○學問所ゟ市中講釋聽聞之もの百人ほとつゝ不怠しかるに行儀のよからぬと聞けれは左之書取を出す昨日儒員育介參り候間承候處學問所之講釋不絶百人前後之出席有之重疊に候右は手習之師匠共召連て出候義に付先ッは專ら十五歳以下之兒輩と存候よつておもひめくらし候得は講釋の當日は兩親共不一方世話にゐ不手廻り之ものは子を抱なから母は食事の世話いたし父は商用をかき候ゐ髮とりあけ遣候類之義に可有之候勿論思はぬ衣類之洗濯も學問所ゟ出候たけこゝろいたし候譯に候處一向に其効無之候ゐは奉行所にゐいらぬ學問之世話をやき候ゐ兩親ゟは厄介をかけ子供には半時はかりもくるしませ候ゐ不仁之至とも惡さまに申サは可申歟に候いかにも親共之心をくみとり候ゐは忍ひ兼候事故子供之分月に兩度之講釋に參り候節はをとなしく育介ゟ辭義いたし其通に日々手習之師共方ゟ參り候はゝ辭義爲改宅にゐは朝と夕とに子供らか親々ゟ御機嫌よくと申候ゐ辭義いたし候を孝行之いろはにいたし追々と親に孝行にいたし可申學問所ゟ參り候上は必親へ之つかへ方大切と申候ことを講釋のつと〳〵同しことを申聞かせ其上講釋に取懸手習之師共もよく右之趣に子供に爲敎候樣之義有之候はゝ年數を歷候うちには風俗の助に相成候樣之義も可有之哉奈良市中之親共ゟいろ〳〵の世話をかけ候ゐ少も親共之ために相成不申候ゐは氣之毒千

萬なることゝ常におもひ居候間せめては法談説法に參り候老婆らか其日一日はよめのこゝとを少申候位ゝ意味には學問所ゝ効あらせ度ものと存候如何可有之哉此上名聞はかりゝ世話に寄市中ゝもの共又候難儀爲致候様ゝ義にゐは吳々も不宣候間何ゝわけもなく一ッ足をあけ一ッ手をおろし候はかりの勞にて若哉被行候はゝ右ゝ趣にいたし遣度と存候間書面ゝ上に不拘只々事實におゐて十年ゝ後に其効あらせたく且市中ゝもの共も難義いたし不申義共よく惣年寄共にも爲御咄育介とも打合候ゐ了簡可被申聞候と申候與力にゝ書取を下候處けふ罷出て申すはなら市中ゝ手習師二十年前迄は嚴正なりしか近頃は風俗衰候ゐ師匠より子供にゝ菓子を與てきけんをとると申譯にゐ叱るなとおもひもよらす日々師にゝ辭義なと百に一二を數ふるにいたるよつて何卒子供らにゝ申聞するさとし書を書くるゝ様にと儒生ゝ願故われもと文盲にゐ才もあらす漸と御用向ゝ義曲りなりに間に合すると申譯に付夫等ゝ書取思ひもよらす扨々弊風の躰歎息ゝ至に付口にていふより仕てみする方よろし此次ゝ講釋日には子供にゝ申聞することくわれ先育介にゝ辭義いたし禮をつくして講釋を聞歸るへし育介も必いとはすしてわか禮拜をうけよ何も例といふにはあらねとも聖堂にゐ　御名代ゝ御拜あり三老五校へ天子祖牲をさくの禮あり後漢の明帝の桓榮を拜せられしはたしかに史にも載ありしと覺へし也先ッわれを手本に其所作をなしてみするに何ゝ事かあらむ既に予平日講釋の度に紋附たる小袖を必着し開卷のとき平服し講釋中嚴師へ對ことく兩手をつき居り畢ゐ又平服する也これは月々常のこと也夫を學問所にゝうつすのみの事也子細あるましと申遣したり

○廿二日　時雨　俊藏かたの少女おさとへ向ひいろ〳〵のはなしの序に奥さま私は仕合のよきこと候へぬ隣のおはさむ順作妻也かは長き御病氣也よつて頃日は仕ことをする婆々アを御やとひあいさむ順作の少女かの方へゝを縫也しかるにわかかたの母は一度もおつかさんなといひしことなし丈夫にてわタクシにへゝを

縫くるゝ也これはまことに仕合也といふ也又畫本のけや村の六助か物語して聞すれは其ことをよく覺へ居てきのふか畑にて何か摘居る故に精一か畑にて何をするといへはこれはおとつさむにあくる也おまへはけや村の六助か孝行のはなしは御存しなきやいかにといふみな〳〵笑ふ也中々市三郎なと不及也

○廿三日　はれ　至ゑ暖氣也三月頃の如し六十一度也中數より暑のかたへ一段高し○重ものを輕く遣ふために平日の刀より二百目目かたのある五尺余の棒を造らせしに金時と一目の入道か由來靈寶のことものにゑなか〳〵ふり廻されすよつて百七十目減たるに夫にゑ漸遣へる也刀より五十目ましなれ共刀貳本かけより重し刀は正目かた八百目なれ共先きかるく柄つは等にゑ輕けれは刀を千五百本位かる〳〵とふれる割にゑは壹貫六七目位の棒はふれる筈なれ共存外のこと也人々刀を論するに利鈍とやきはなとのことをいへ共目かたとつり合をいふものは十人か内二三人に不過なれ共少々は及二の次のものにゑもかつこうよからは勝負へかけてはそのかたまさるへしいかに良刀なれはとて中卷直しなとこゝろあるへき事也つり合かつこうのあしき上作なし左もあるへきこと也貳朱にて少も持てぬものを造れりされ共遣ひしも同しことなるへきか無益のことを棒にふるといへははつか一字のてには位はゆるすへきか○酒井良佐殿ゟ刀をみせまいらすれは必つかを握り少々ふりみて遣ひよき御こしらへよき御刀也と申されしをけふけにもとおもへり

○廿四日　晴　與力より大根をくれたりあまりに大也よつて改みしにさしわたし六寸あり目かた一貫九百五十匁也かゝるものはなしにもきかす

○夏かせか點せしうたかれこれ五千はかりありよるかあるはひま〳〵によめとも年々に千二三百もよむ故なるへしこの地に來り人々のたにさくもとむるのことの折々あれは其料に其うちより四季と雜を選み出さむとおもひて五六年來の咏草をみるに五六年已前も今も少し趣のかはりしは

あれとも意はおなしことにてかはれることなしこれ畢竟こゝろの修行たらすとしは五十の成德の場にやゝ近けれともいつも同しことにて移らぬ愚也けりといと〳〵かなしいかにせむと後悔する也幼年のときより一伎一藝にかゝるか或は學問はかりをもいたしせしならはかくはあらしいかに生甲斐なきことにやと歎息のことを折節側へ出し龍介に申せはかく御役をなされたるか大事にゐ藝は余行也といふわれいふはしかり藝のならぬはいとはす御役と藝とのことなるもしれりされ共御役は芙蓉之間の席に加へらるれともと我は汝らとかはらぬもの也只与風の運にて主從ともなれりこれは君と天命とのある也乍去御役とおもひつとめしは今まてに至ゐ少し平日のことみな利と欲とのために御役をつとむるにて全に利欲のための祿盗人也常に全に御役に心を置ことはなく利欲にこゝろ置ことヽにして九に過たりすかたはかれこれよりよきに似たることはあれ共よく源にさかのほりみれは利にさとるのみのこと也かく段々とおもひめくらせはいきても虫けらの少々惡才のあるもの也いつか生かはりて全と人と成らむ仁を欲して仁いたるこゝろの勇たらぬ故かかなしといひしにおさとかいかに御生れかはりてよくならせられたれはとてあれは左衞門尉か生かはりし人とは一天下にしるものあらし夫より只々直に心を御改ありて常にのたまう善に進み惡しきをさるをこゝろのしるたけ朝夕になさるゝにしかしといふわれわらひてこの愚にして生れかはりたらは虫けらか乞人非人の子に成へくもしらすしからは今のかたまたよかるへしやといへはみな笑ふ也あゝあたしことはさて置ぬいかなる小人にや悲しきこと也奉行職眞に勿躰なきこと也○けふ被頼ものゝうたなとしるし候ゐ夫を讀書にかゝり居候處六半時頃十月十三日出ゝ書狀相屆く開き候處母上ゝ御狀なし夫とおさとのさわきにゐ動氣なから御案事申上る新右衞門ゝ書狀をみるかよしとて一覽するにはしめに少々御腫氣乍去御佛參等有之候由追啓に御直書無之候は會式中所々御佛參御事多故とゝ事に付安心い

たし候義に御座候早く御快被爲在度義に御座候全一周忌之法事御當り被成候故歟とおさと落涙なから申出す同意也赤小豆御用至極なるへし予にもをり〳〵左之足に腫氣有之候　行道公之きさみさや〳〵と被　仰候ゟ御すねを御押被成候位之義也右に付とくとためしたること有之候はれは一ケ所に有之候得は惣身に必廻り居候其内人に寄顔或はすね腰等によくあらはれ候義に有之候少々にゟも腫氣有之候得は手を握り候得はちとはれを覺申候或ははたかに成胸より腹を見候得はさゝなみ立居申候みな水氣に御座候麥飯に赤小豆大承氣湯よりよろしく候御歩行第一之義と奉存候○甲冑之革之義に付御申越御尤に候右之革厚過候得共夫をたゝき附候得は七八リン位に相成申候此ほとくさすり計先こしらへかゝり候間出來之上にゟ面頰の下サンにても懸御目申候當所に甲冑師穢多頻にこしらへたかり候間先試に爲致申候先に記し候所と御引合可被成候中書朝臣の甲唐牛皮かも難計候其頃唐物不自由と之論難計候得共如今さらさ羅紗等之慰物は不好候得共武にかゝり候ものはつのりたる事に可有之候三河さふらひからのかしらと申候もの麁牛の尾に御座候夫を以も牛は唐牛なるへくと被存候○九月廿四日之日記之事被仰下右にゟ又愁腸九回候○申進候趣御丁寧に被仰下候ゟ却ゟ赤面に候つまらぬ物をも良醫は用ひ候間牛溲馬勃を進し候處御用候由忝候○與力之二番目の老人至極之貞實なる出精ものにゟ名は羽田健左衞門と申候それか遲々なから初孫出來候ゟよろこひ候由女子のよしに付いさゝかいはひ遣し候ゟ

生初て雪にいさめる姫小松千世のみさほは二葉よりみゆ

とたにさくに記し遣したりしか大悅にて卽刻用人方迄禮に參たるとの事也孫は格別の事とみゆ孫と申せは太郎は成人之由いか成顔になりけむ敬次郎は知ル人にも無之なとゝ折々存出申候しかし夫は何ともおもひ紛候只母上の御無病をいのり候計に候○夏かせの點せし歌共家來に夕かたしらへさせしに五千五百余あり其外佐州已來五千はかりよみたり元來与風

歌によみかゝりしか不審也しか日本人ゝ役前故よみけれと一万首に及はゝ可止とおもひしかさて更に止へくともおもはねはこれよりは歌の方半に減し其ひまへ詩文にすへしとおもふ也詩作文章のものも少々持來れりこれより用立へし詩は韻と平仄を十六七ゝ頃並へしを覺居はかりみなわすれたりこれも三四千も作らすは口なれまし

○廿五日　雨　けふ市三郎か讀書するを聞に論語の公叔文子の臣大夫僎といふものゝ文子と同しく公にのほりしを孔夫子の聞し召してそのこゝろならは文子か文と云諡あるも尤なりと仰らるゝを以てつら〳〵おもふにこれは予幷新右衞門等かよきいましめのこと也其譯は公叔文子わか家來たるものを引あけて同席まて進ませしを以孔夫子の御稱しありし也然るときは三千年前も下たるものとおもひしものと同席することは誰もいみ嫌ひしことなるへししかるを文子は賢を以擧て其偏執なき故に夫子の御稱しありし也しかれは今の末世にゐ今まて下役とおもひあごにて遣ひひけの塵を拂せし人と同席するはおもしろからぬのかきりなるへしそのことをおもひて代々の歴々たる御旗本ゝ面々ゝ突合可申也さて己か下たるものはよき人ならは早く引あけて進め用ゆるにおゐては孔夫子の御稱をうくるわけ故に少も偏執のこゝろあるへからすこれ人をは並々の地に置て突合われは公文子の聖人に稱せられしほとの地に置て身を誡る也これも一ツのなりあかりものゝ身の持（タモ）ちかたなるへし○法隆寺にかきらすならの七大寺に　孝謙帝の頃御納（ナヽ）めありし百万塔といふものありこれは惣數百万あるもの故に百万塔と云なり實の名は無垢淨塔といふものなるへし其百萬塔ゝ内にまれ〳〵に無垢淨經を御納しまゝのものあり至ゐ少きもの也けふ其百万塔と無垢淨經を得たりこゝに可奇は右經文板木也板本（ヤ）といふは五代のころより出來しものにてこの經文によれは唐（カラ）よりは古く日本にゐ板刻ありしか不審に付法隆寺へ聞に遣したるに日本にゐ經文を板木にせしは此無垢淨經を以はしめとす申來（脫アルカ）れりされは百万塔ゝ内

八ツ時頃六十四度の暖氣にて大雨且よほとの雷電也今の純陰の月にゐかゝる雷雨暖氣あまり可悅ことにはあらぬ也此節いまたこうろき鳴也

にある無垢淨經は四海之内板木のはしめとも可申歟誰そに定説を承度もの也かゝることの調に田舍こまる也

○廿六日　晴風

○廿七日　雨　この頃風聞に上野の御門主の御違例のことあるとのことにて万々一のことあらせられむには當時　宮方あらせられぬ故に一乘院宮の御順なるへしや今より三代前の日光御門主も一乘院宮より御轉住なれはしられすとて御門主も御迷惑の意味春日興福寺領の僧侶等いたく恐れうれふることのよし一乘院宮は不思義に人の感伏する御人なり御門主も此御人の御住職中ならては興福寺の再建もなしとて衆徒共其ことにかゝり居に存外に金主共出來せしよし也不思義なるもの也乍去時にふれては興福寺之僧侶へ學問の御尋ありて御受の出來ねはとくと御さとしありて學問せねは自然如法にも參らぬ也武邊より手をいれらるゝことときことありては御寺務の宮の御不念に付わかゆるさぬなと御沙汰故僧侶共其御樣子に恐れ居りて愼ものも多しと也先達而被召候節御はなしに上に居て寛ならぬものは禮をして敬せさるとひとし寛と弛みたると相違いたすわけを委細に御物語せしに其後儒者の出て易の比の五爻を講せし時左衞門尉か寛の字論ありしか其説をおし廣めていへはかく也王三驅して前禽を失すといふにおのつから寛大の意ありとて御物語ありて左衞門尉か申せしことに多く筆記して置たき心得になる話ありと御意ありしとのちに聞て大に恐入たり春日へ　勅使の被參候而御用濟て一乘院宮の御機嫌を奉伺にもとより御同間なといふことなく御上段に而御下段之其御次に被召御物語ありわれらはいつ京を立しさむかるへしなと御意あるよしなれ共我等か御前に而御物語の時についにわれなとゝ御意ありしことはなき也御丁寧のこと也公家衆を御取扱なさるゝ躰を風聞なから密に聞て恐れ入たり興福寺領二万石内之公事訴訟のことなとこと〳〵く御直裁にて内々に而御家司限りに而いたす事あれは急度御機嫌を損し御沙汰ある故に家司共

神のことく恐れ居るよし也元來下を憐みいかにも穩なることを御好み故に奉行所にゐも取扱よけれ共もと〳〵御才智多けれは人の恐るゝ也一躰は一乘院宮の御家來共と奉行所とすれ〳〵のこともとは多かりしを今の御門主御寺務被成たるよりいたく不法のことを禁せられ池田播磨守なと親敷御前へ被召いろ〳〵の御沙汰にて同人のうたひをよくするとて御好みなとありて奉行所とよく落合て穩なることのよしかゝれは御門主なと御轉住あるとならの一ッの治の六ケ敷なることなるへしとおもふ也この御利口にゐ御月代嫌ひて奉行に御逢の時は御はさみにて五分さかやき也平日は百日かつらよりも長き御樣子のよし全に御月代のあるは參　殿の御時計と也儒員のはなしに至ゐ御儉素にて平日豆腐一菜位にて御膳の時御酒被召上て其時儒者なとも御前にて御酒被下るゝ也實は難有計にゐ酒をのむなれ共たへらるゝものとてはなし恐入しとはなしき

○廿八日　晴　庭の芝生にて御隱居樣へ茶の口切奉りたきよし兼ゐ龍介の願也勝手にせよと申聞置たりけふ風ふきける故にや庭にはなれてある馬見所にてかの芝生をみなから茶あり御接伴は民藏順作也龍介麻上下にて給士する天目の式也といふ也かゝることあるごとに母上の我をきらひて御出なきを号泣する也

○廿九日　しくれ　けさはれたりけれは市三郎義五十日の閑居果しのちしはらく立しかは延氣にふるの瀧」こは清少納言か瀧はふるの瀧と申せし所也」布留の神社」こは日本神社ゑはしまり也」なと見物に參る順右衞門平吾供也三里もあるへししかるに時雨甚しけれはいかにせむと一同いへ共仕かたなし日くれに歸り來る土山永久寺にて笠かり來りしと云　御朱印地にて大地也源朝臣頼朝ぬしの建給ひしまゝ少もかはらす存せりよき寺也一兩日はことにさむし遠山のみねには雪みゆるといふに大濡にぬれてかへり來れりせつなかる故におさとか戯にふるといふ所へ行てふられしは當り前也なといひてなくさむる故にわれもそばより

ふるの瀧ふるの社の村しくれぶる〳〵として歸る夕くれ

といへはくたひれなから市三郎笑ふ也こゝの人々は少の遠足にも瓢簞を必たつさふる也しかるにことに酒すきなる人一瓢酒を携てもみち見に行て山にて芝たきつくるひまに瓢をもみちの枝にかけ置しにあらしや吹けむすら〳〵と梢を傳ひてまろひ落て黑旋風に切割られし仙人の首のことく眞二ツになり酒はみな流れたりかの酒家忽に面色土のことく又菜のことく成りて涙くみたりしか仕方なかりしと也或人のかたりしは其人終にとりつめて悶絶せしをかたへの人耳にくちをよせて呼活けるにまだ酒はのこりあり氣をたしかにせよといひしに其ことのきこゑたりけんウンと云て蘇生せしとなんいかにやあらむ覺束なきこと也

○晦日　晴　先達ゐ與力より大根をくれしに驚しにけふ又一層の大なる大根をくれたり壹本の目かた三貫六百目ありさしわたし八寸二分はかり也下女共もてぬ故にかゝへ歩行也全におたふくか松茸を抱きし眞景也われ壹人にゐ食はむも可惜けれは一乘院宮へ爲持あけたり宮もはしめて御覽との御事にゐ御近習の人々にはかりもてこよ繩にゐふとさ廻しみよとの御沙汰也と使に遣したりし儒者の歸り來ていひし也出所をきくに木津の邊にてことし七本出來しを二本は被盜てはつか五本ならてはなしといふ也十本にゐは道中ならは人足七人余ならてはもたぬ也實に驚たり尾州大根なとは泰山の丘垤におけるかことくおもふ也○日くれて順右衞門方ゐ今曉とりし猪肉也とて少々くれたり足の冷るを養ふへしとおさと市三郎と予とくひみしにかもよりも美也おさとゝわれは三切はかりにてやめたり市三郎は露を飯にかけて食するにいたれりかゝる鮮美の肉はしめて食せり○此頃重きすこきやりと棒をつくりて朝々ふりみるにはしめは二三十位漸なりしかはや三百余に及へり力業はけふは百明日は百十と修行すれは其効のみゆれとも心の修行は少もあからすもと虛にしてあとなきもの故にいと〳〵かたきことゝみゆる也よき師に逢て朝夕に教を受たら

は早く直るへきか田舍はこれに困る也頃日あるとき鏡に向ひみしに齒の黑き所と白き所と斑にていかにも見苦し日々に不怠みかきて白を不欲さるにあらすされ共かゝみといふものをみぬ故にまたらなるきたなきをしらぬ也これを以てもよく師を撰ひ師をかゝみとして直しもらひたき事也いらぬことに勞し勞して更に効なきことわか齒のことし可恐可戒こと也こゝろは虛なるもの故聖もおもはされは狂と成又仁を欲して仁いたるの意あり可恐たのみにならすして賴へきはこゝろ也

○十一月朔日　晴　一兩日大に寒し四十二度前後也池に少々氷あり

木からしのちらすもみちをたよりにてむすひ初たる池の薄らひけふは忌明のかとにゐ民藏方にゐ市三郎を招待せし也とりもちに順右衞門與助參る吸物幷肴膳菓子等まていつる市三郎枵腹大に潤澤せり民藏之長屋は新規にて至ゐ奇麗也具足ひつたにさくかけ其外かけ物等大にきまりたる事之由也三間ほとあり臺所玄關あり納戸あり庭あり菜園あり江戸ならは先與力位なるへし御徒はなか〳〵叶ましき也

○二日　晴　けふ小かもの賣物來るつかひにて三百文也きのふかゆふへかとりし也如生其上に酒のくちかはりてことによしとのこと何分ゆるされす四ッの太鼓をきゝて聯珠詩格をよみなからかもを烹て食せり何分茶にてはこと不行戒行こゝに破れて酒一合をのめり其樂いふへからす其興に乘するによりてたちまちこゝに母上のおはしましたらはといひ出せはおさと何ともいはすさしうつむく也いつもこれにて興は微塵になる也けふ夕かたより七ッ位なるへし下女例の通罷出て今夕の御菜はといふおさと少々頭を傾しか案しのなかりしとみえて大根をとりふろふきにせよといふ今ゟかとおもひしに無間もめしといふ故にはしをとりみるに庭の大根こやしなしもしはしの内に豆腐のことくに成也おさといふ大根は江戸のさつまいもと同し油斷をすれは烹過るといふ也このときもおさといふ

江戸にゐ母上の大根を好ませ給へは柔らかにとおもひて烹れとも〳〵柔ならすはてはいかに〳〵とこゝろみにさしたるはしのあとのみ星のことに成てこまりしかかくも故なく烹ゆる大根をわか家の前栽につくりて母上に奉りたらはいかならむといひて其時もなきし也この頃はなにそといへは母上のならへいらせられぬを夫婦よりて號泣する也

○三日　雨　けふ通鑑をよみて則天か僧懐義を龍愛せらるを諫爭して男子を大奥へ立入らすること例あれは可然なれ共閹官のことく陽物を切て奥へ立入させむといふことの用られぬをみておもはす笑出せし也昔伊勢の慶光院の内に美人ありて還俗して女中に被仰付たるときときの執政より妊身之義は不相成由申上たるよし彼寺之記錄にありしを吟味のときみしかと覺へし

○四日　雨　つゝきて暖氣也六十度なりけふ畑にて手つくりの人參をおさとか戯にぬきみしに大成大根ほとありめつらしとおもひてよく洗ひみれは四五本かたまりし也おさと此ほとやゝ先ッ全快の躰にて針又は筆とりても障らすといふよほと肉つけりとみないふ也

○五日　雨　暖氣六十一度におよふよるこうろききなくいとめつらしけふ榮吉に詩を一首和韻せよとて遣す

官海浮沉三十年酸辛嘗盡漸知愆笑言碌々無成事未向民間貪一錢

詩も又三十年はかり止たれは何も〳〵おほつかなくおもふなれと与風おもひしことを題せし也○昨夜七ッころなるへしもの音夥臺所のかたさわかし賊の患は二百年來曾ゐなき所なれとも火のもとのこと無覺束女共起出ねはおさと密に臺所に行表臺所のかたを鎗口の戸のすきよりみれは田村與助眞はたかにて六尺棒をもち手々にともし火をもちて小遣ひ共さわき居也何さま鹿の來りてわるさをするを逐ふ躰也こは常のことなれは其まゝ又ねたりけふきけは角三またなる壹尺六七寸二尺もあるへき鹿來りて澤庵大根を干たるをくらひ其上に從來の置附の大米ひつをあけてこめを

くらひ糞をしたりされ共與助一人にゐは大鹿なれは無覺束小遣共と逐しと也江戸の犬ならは打殺もすへけれとも鹿は打こともならねは地をたゝき立て逐ふ也乍去奉行所にゐはまたも嚴敷逐ふ故に人のそばゝよることはなけれ共市中にゐは座敷ゝ上り障子の帋をこと〳〵にくらひ或は野菜の畑を一夜にくひつくすなれ共少も逐ふことのならぬ故に悠々として居る也

○六日　くもり　雪おろしといふものなりや雷に似て雷ならすとろとい ふことしは〳〵也夜五時頃六日限十日限の宅狀來るはしめをみるに封書の上書　母上の御自筆なり予もおさとも市三郎も　母上の御自筆とて頃日御病氣のこと承れは先よろこふ也持出しは俊藏なれはそれと汝封きれ われかたはらよりよまむとよみかゝる其内四五日以前にやあらむ昔のすかたにて彰常とおしけのたのしけにものかたりして彰常もさえ〳〵しきすかたみて汝は病候てかろからすなと聞しにはやこゝろよきやいかにといひなから人つてのはなしにはなき人の數にいりしかとも聞しまことかいかにやいつれにもせよ健なるすかたみるかうれしよくもこゝろして養ひ候へ相構て煩ふことあるへからす父母のやまひをうれふると孔夫子の仰られし汝におゐておもひしるなといひて生かことく親しくものいひし夢みしことのありけるにけふの宅狀いかに〳〵いと〳〵かなしとてみるに其夢のこと常には佛家にてさへも幻夢といひてまさしからぬことのかきりとするといひて人をあさみ笑ふ身なからも夢のことおもひ出てとてもこよひは寢ることの常のことくならむはいとかたしやいかにせむといひつゝ新右衞門はくれたりしからすみをみてわか常に好めるもの也いさやこれにて愁腸を洗はむとて四ツの鼓うちてのち一壺の酒あたゝめさせからすみを食してふしとに入りぬかゝるときはあるひは通宵ねられす酒の力にて安眠することもある也これにつき一話をしるす予も新右衞門も幸三郎も　父上と母上の山海よりもいやまさりたる恩を報ひ奉らすよつて其万一に奉報は母上ゐの孝行也それには外になし兄弟三人か日々健に

して盛につとむるにしかししからは涙はすてゝたゝ一身の健ならむ事をこゝろするを孝ならめとけふそたしかにおもひぬはや九ッの太鼓のころとなりぬれはのこりはあすの日記としはし筆をとゝめぬ

○七日　晴　少々氷あり泉水はいまた氷らす○海防新篇の善書御借出しゝ由早速御騰寫しかるへし書物はよく聞かぬと惡本或は別本なとに取かゝり大に損をする也以前海運のことを調ふることありて文獻通考をよみしに江河の川運送の論のみにて海運のことなし追ゑ古賀小太郎に其ことを申せしに海運は元より盛に成し故に續文獻通考にありとかたりき名所へ行てあしき案内者をたのみしと同しことにて追ゑ〻後悔多しよき人に聞へきこと也○普化宗〻一件落着〻由さそ御骨折なるへし勇士一眈〻隱家〻說はいかゝなりしや○井上傳兵衞復讐のことこのほと一向に沙汰なし封廻狀に出候はゝ御聞かせ可被下候○紀州より御拜戴もの御うらやましゝ○土屋に出產ありしよしよき勢也これも天也人作にゑ人作ならぬもの也○遠山延次郎を御救被成候由〻日記いかにも可喜〻至也これのみ也子孫へ可傳もの也金錢諸道具は死して肉と共に分散して子孫へ大害をのこせり陰德はかりはのこるやう也陰德とは俗へ敎ふるの名實は天功の一助をする也新右衞門なと困窮の時余いふかれか困窮は幸三郎と違ひ一向に患ひなしみよ〳〵今によからむといひしに果してしかりこれ先祖の德ありて新右衞門我にむくひ來りて夫ほとの御奉公の出來る人に生たまひし也家の盛衰は人にありて貧福にはあらぬ也延次郎の御取計何より大悅これ小事にあらす後年の盛衰にかゝること也かゝること度々承りたしこれも財あるとき儉を專として積置かねは決ゑ出來ぬこと也○卷藁にゑ弓術御ためし的前にゑ參り不申譯に付安富のはなし尤至極也其はなしにても安富の射術に付心を勞し慮を困しめ上手にいたりしをしる也何事もこれに過ることなし的前は的前まきわらはまきわらと別物にならぬところ甚おもしろき事也存養警覺するはみな日々の行跡にあらはるゝの本也一躰

學者は書物はかりをよみて書物上のことにかゝり實物にかゝらぬ故に武人又は藝能のある人々より内を養ふは外の行跡のためといふこと口上はかりにゐ實事あるは至ゐ少し武人藝者はみな日々に其ことを爲して試むる故に眞實の論多し安富のはなしを以行跡の上へかけて日々にみかきたらむには聖人のみちにいること早からむとおもふなり凡人ならぬ事と深感歎しておもしろき事におもふ也夫に付ゐも常におもふ十分一も出來ぬことしるへし平日の稽古半分實事に出る人は最上也三分か一もかたしといふ意を戚南塘か兵書にもときありし也安富のはなしを武人の不文まゝかゝせて懸物にいたしたき事也弓術此上の傳授はあるへからぬ也鐘三郎も弓上達のよし元來　行道院樣弓術御好にて御一生の御たのしみなりしか予は少も出來不申候誰か一族のうちにて其ことをつくものとおもひしに鐘三郎出來るならは出精させ度もの也弓は的前三分に卷藁さし矢七分なるへしと常にいひき新右衞門宅に的場なき此上なき喜ひ也彰常にもまきわら百本さし矢千本的前二十本に過すへからすといひ聞かせしかとかく的をおもしろかる也矢場の宅になきは出精する上には欠たることくにして尤可悅のいたり也しかし新右衞門なとはこゝろの養にいか樣ともあるへし○新右衞門とわれとの戒にしるす唐朝の人に兄弟盛につとめし人弟ゐ段々御互に結構ありかたし以後は申合可愼さて若人ありて汝か面へつばを吐かけたる時の心得聞たしといひしに默して拭ひ置へしといひしに其兄大に心配してそれにては兄弟長く盛ならむこと無覺束人かつばを吐かけしを拭ふことやあるそれにては丸く突合といふものにあらす捨置て干くを待へしといひしと也この人妻孜德とかいふことき名にて正直豪傑にて天下のためをもせし人と覺へし則天のころの人也われこのことを感してしるす也

新右衞門此ほと出精にゐ事被行樣子也遠國よりなおもふこと新右衞門なとこ玉のことし眞わたにくるみてもまた足らすおもふ也事の出來被行とき恐こと也我かいはなきろ〳〵の難義みなし少しく勢ひあり被行とき也こゝろしにめくみしてつとむれは勢あり言隱被行德も忠義こも出來こそる也君子れの力ゐ可盡とき也

○八日　晴　われ詩作も學問も十七歳の時聖堂御試に出落第し同しとし御勘定吟味に出其翌年支配勘定出役になりしよりは諸藝共に癈しひまあ

れは通鑑にてもよむ位のことにゐ詩作を癈し三十年に及ひたれは韻も平仄もしらす頃日家來の詩をみて評することあり日課に詩を一首ツヽつくらせてみる序に与風詩のことをおもひて前に記せし一首の吟ありもとより眞の偶成にて題もなし又偶成に

踏霜朝試刀矛術秉燭夜尋伊洛源錯寵今昇太夫爵微軀何日報君恩

といふ一首をつくりしに家來か題咏せよとて初冬郊行といふ題を出たり一夜かゝりみしにおとなけなきやうに字書にゐ平仄を穿鑿するわけにゐ字典にて掌中詩韻のありしをたのみにわかゝへりて十四五歳の時のことくに成つくりたり中絶の武藝息きれ目みえすくるしむと同しことにゐ筆の先一向にいふことをきかす人にみせむもはつかしきことなれと日記なれは記す也

年々官路只困忙初試吟鞋十月霜風掃斷蓬卷晴雪雨收殘葉媚斜陽住節迷立三叉徑呼艇暫休半畝塘傾倒一瓢壓寒酒蹌踉任足醉歌長

吟步探楓西又東嚴霜拂草野蹊通杖錢漫欲買微醉酒帘斜風招此翁

○九日　くもり　學問所ゐ參る兼ゐ申聞置て儒員出迎なし與力は玄關白洲に平伏惣年寄は門前に平伏也例ゑ通挨拶して奉行ゑ扣所ゐ通る扣所には毛氈をしきまき書の烟草盆刀かけなと出しあり無程講釋初る樣子に付聽聞ゑ子供ゑ上坐講師ゑ前ゐ着坐着坐已前に講師ゑ前ゐ出て謹ゐ平伏講師答禮あり開卷ゑ時平伏畢ゐ平伏夫々又講師ゑ前ゐ出て平伏して扣所ゐ引尤例なから聽聞中手を附居し也供揃といふこと故又講師ゑ前ゐ一寸坐して挨拶講師送りなし與力町代惣年寄等前の如し夫々歸宅○ならは鴨下直也昨夜とりしといふ青くひ六百五十文也買は必兩御隱居樣ゐ初穗を奉りあとはおさとゝ給る也市三郎ゐおさと必予と同樣に遣す度々とめても聞かす諸事かくの如しよつてけふおさとに云聞かするは何も市三郎に給さすましきといふにはあらねともかれは次男也一躰としわかきものは少もくるしきめを多みたるかよししかるに市三郎は此節若とのさま同前に

て家來共市三郎さま〳〵といふ也然るに食物等予と同しからむは以ゝ外也新右衞門か已前もわれか十六七歳の時も一躰　行道院樣御儉約なれは何事も御嚴重にゐたとへは御平日質素にゐ丈夫なるものを好ませ給ふなれは土瓶といふもの家を擧て一ツもなくみな廣嶋藥鑵にて事を辨せし也しかれは余は右に准せしことにてわれも鬼ふとりの單物木つかの刀脇差にゐ所々登　城前といふものをつとめし也人のかたへ行て手帋をもらひ事をとる人の面謁に行ときに其人御袴は多あるへけれともたま〳〵けふの御服なよひたりわか袴かし奉らむといひしにて其余しるへししかるに市三郎等今みるに懷中物なともあり衣服等ことかくことなし何も　御目見以下小普請の如くせむといふにはあらねとも食物其外共不自由を不便とおもはゝなる丈さすへし不自由を少年の時多する程大人になりて苦勞少し決ゐゆたかにすへからすしかるに目前の恩愛に溺るゝと却ゐ幼年のものを深きふち瀨におとしいるゝに同し新右衞門幷予らか幼年のときおもふへしと嚴敷いひ聞せしかしこくも　行道院樣前にいふことく被遊し故にわれも新右衞門も十五才より遙に前に養子被遣たる程の御手當はありし也其こと今しろしめす御方は一天下のうち　母上のみ也いかにせむかなしきは　行道院樣奉惜は　行道院樣わか廿一才新右衞門か十五才のときに隱させ給ひて今の百分一のことを露しろしめさすいかにせむかなしきことならすや可奉惜ことならすやわれ頭の相對に出るころ懷中ものなし行道院樣のメンて鵞絨の御はなかみふくろの外入を拜借して夫にてことを辨せしこと一年余其内左助殿の御はなかみ袋のふるきをもらひて十九歳のはるまてすみし也それは母上の今もたしかに御存のこと也元來市三郎なと過當也とていたくしかりし也

○十日　雨　與力の橋本喜久右衞門と改名せしもの昨夜獵に行てとり得しとてかもをくれたり新鮮ことに美也このもの出精して御用立ものなれは右ゝ挨拶のもの遣す序に改名をことほきて遣したりもとより出まかせ

也

くちぬ名を千とせにかけて白喜久のいろあらたなるいは橋の本

よきことを八重九重に喜久のはな其ことほきは名にそしらるゝ

○十一日　雨　元來九日の日は夕かたよりくもにかくれ十日の朝日紅なひにして午後よりうちくもり全に必雪なるへしとおもひしに朝五十度の暖氣に變しけふもはる雨の如し○門番不快也しか快氣せしとてけふ赤飯をくれたりくろ塗の立派の重箱にて繻子へ金縫の目を驚かす服紗也何ことも大江戸に及さること勿論なれ共國持衆の門番にてもかゝる服紗はあらしけしからぬ事也門番の病氣胸痛氣病也といふことなりしか左もあるへしわか來りしまて下女壹人を遣ひ居たり門番はいかにと申せしこともなけれ共去年の半より下女は暇遣し此ほとは大に困窮するとの事也困窮してかくの如し其以前のことおもふへし此門番冥加のためとて徒士に出且先々之例にゐ紋附之上下を遣す也よつて徒士田村與助より從來之勤之願を以自分入用にゐ紋附之上下着用のこと相願ふ不相成旨申聞置候處いろ〳〵出精之品も有之既に中小性格をも可遣との用人共評議もいたし候ものに付御祭の當日はかり紋附之上下着用之義相願に付自余之例先格には不相成と之譯申聞一日紋附之上下かし遣す積に成きつこうに三星の紋の格別に難有聞ゆるもおかし且無勿躰事也これみな　御威光のあまり也

○十二日　晴　此ほと同心共玉落也四拾八兩貳分ほと也庭のかもおし鳥の羽のひてよほと高とひをする也よつてさふらひ共にいひ附て大あみをはり泉水中を所々より追ひ廻して網のうちにいれてとりて風きり羽をそく也おもしくろ興あることなれはわかきものみなよろこふ也市三郎兩三日少々よし學問出精四過まてもする也つゝかはよかるへし○此ほと所司代御大病之由所々にゐ風聞也○紀州より香爐之臺に勝男武士を給はる新右衞門同事也

○十三日　くもり又雨　けふ組〻與力筆頭〻もの懸り〻公事に六ケ敷とて予の再席を頃日願ふなれ共いやみな先生かたの懸故わか手を出しては六ケ敷かるへしと云て聞かす職二藏までの吟味物は多こゝろありて近頃かくする也昨日出ていふは仰御尤なれ共又醫者をかゆるもよろしからむとて再應云故にしからは聞へしとてけふ呼たり評席前に懸り〻ものゝ尋みるに八九分は濟居るかことき一件也しかし左もいはれねはなか〳〵わかきゝたれはとて行へしとはおもはすいかゝあるへしなといひつゝ白洲ゝ出て聞みるにたとへは既に大工の何もかも出來上り建前に一寸の迷ひ出たるなれは枯たるをくたくよりも安き耳也よつて其迷ひヲときたりしに八九分通承伏の躰故わか利害承伏したらむには某か出よ誰はたてよ存寄あらはとゝまれといひしに氣〻弱きやつなるへしはしめに御利害難有といひし故左あらは其旨書付を出せ汝に用なし歸村を今日中に可申付といひしに難有とて立退去せり夫より承伏のものはみな立たせしに只壹人我意もの殘れり汝壹人不承知ならは存寄ありと今までの柔なりしにかはり一聲迅雷のことく叱りしにいたくおそれあゝ恐入ました〳〵と地を頭もて突てわひをいふ故に尙さとして存寄なきと〻旨再ひ三たひに及ひて出しやりたり濟口認中の日延に成たりかの與力諂言を夥のへて感歎せし也是あやまちの功名なるへし○長崎より便あり度船なく唐物拂底也との事也

○十三日（四カ）　くもり又雨　至ゐ暖氣也六十度に及へり米相場八拾四匁九分五厘也左もあるへし○おさとかたへおけいかたよりねたり物云來れはいかにわかきけむを損するをいとはすいろ〳〵にして骨を折こゝろを勞して申ことくになしやる也其時々予に叱かるゝこと夥ししかるをおけいは露しらす所生の母よりも甚敷あまへたることいひ越す也母のくるしみ子つゆしらぬ也としわかなるものの可憎にはあらねともこゝろすへきことなるへしこのこと予は可遣おさとはやるましといふと違ひよきことなから

おけいはおさとの難有ことをしるへき事也

○十五日　くもり又雨　朝五時前五十度の暖氣也○月並ニ禮受ること例の如し

○十六日　晴　昨夜大風雨所々垣根損せり今曉刀槍をふり候にけしからす暖氣にて汗如酌五十八度也○勘當願に出し候もの直り可申躰ニやつ故入牢申付置て過日親を呼出し汝子さしての惡相なし嚴敷なしたらはなほるへし勘當ニ義一勘辨せよといひしに今日御慈悲願申出ルに付汝かくの如くあまき故に勘當する次第に至れり我わひことにゐ勘當をゆるして又惡事をさせては如何に付小博奕なとあるへくもしらす明日牢間ニ上にて願ニ趣を聞置へし嚴敷父の子はわるくならぬ也奉行を恐るゝことく父を恐れは惡黨とならさること受合也嚴敷すへしとし老て子を勘當するといふか不便故に汝にかはりて折檻する也といひ聞せしに親のことに喜ひて難有躰みえて家來なと父子の實情にみな涙を流せり奉行所ゐ勘當願申出るほとの子にてもかくあはれかる也夫故に父子の間は義を以愛をさくへしとは尤なること也かゝれはあしき子の出來る筈也あした嚴敷責てめくりニ一ッもいはせて出牢して引渡やる積なり子は嚴成にしかすと白洲にゐ大に說法をいひき

○十七日　雨又あられふる　さむし○この頃書物をみておもひめくらすにわれ大節に臨み不可奪といふほとの場に一生涯のうちに行屆たしとおもへとも平日のこと疎漏にしてこれにては無覺束尤小節に不拘して大業をなす人もあれ共夫は出來上り十分ならす且危し易に庸言庸行を以大人君子となる基本としたるを以おもへは平日の小事十分ならすしては大事は破るゝこと多かるへし五十は成德といふに今尙かくの如くにては殘念なるもの也新右衞門なとよくこゝろして御出精あるへし夜中燈下にゐ書をよみ段々くりかへしおもひてこゝに記す也

○十八日　晴　御用日目安六十口余追訴といふもの二十口余出る其しら

へに與力共夜五時まて相かゝる也昨夜けふ夫々に渡遣す○夜四時頃おさと補藥としてかもしか七きれほと給候右ゑわきに市三郎手習して居候同人にはかもを烹て遣す平日のことかくのことし市三郎たるもの其恩を知らすしては不叶こと也夫等に付ゐも彰常のことおもひ出てともに去々年もの給しことはかくなりしなと存しの外なみたをなかす也けしからぬもの也

○十九日　晴　廿一日は御役所ゑまつり也例の通猿樂をするかとおもふにさしき其外ゑ沙汰更になしよつて與力に尋みしに當年は其ことなしといふ夫は如何也われさる樂をせねはとて稲荷ゑ奉納を癈する樣やある必我に不拘さるかくをなすへし其上我より癈するもいかゝ也といひしに與力共大にこまりし樣子にゐ追ゐに成當年は幼年ものゝ猿樂をするをやとひて出すよしを云故に夫はいかゝ也與力の若者らかたのしみにするを我もみてたのしむ也余人の猿樂好ましからすといひしに實は當年は若もの共劔術なとにかゝり居候故に猿樂は如忘なり居し也しかるに今俄に好みあらむには大に困る故にかくの如しといふ也一躰奉納のさる樂にはよほと與力共入用のかゝることなるへき故とめたしとおもひ居たれ共所謂一日の蜡故におもしろくおもふ躰にゐさせ置たるに右ゑことくにゐは迷惑をかくるわけ故にさらは申にまかせて當年は休てもよし先格ありやといへは猿樂をせぬこと夥例ある也遠國のことみなかくの如し此こと前後するとわるくいはるゝ也このほとならは自然とさる樂大にすたりて其師たるものゝ宅さひしくさらひなといふこと半に減したりと民藏いふ也上の好むところ可恐こと也孔夫子か季康子の盜を患ひて奉門しにいやしくも子か不欲ならはこれを賞するとも盜人はあらしと仰られしと同しことにて上は源也下は流末なり上は曲尺也下は其もの也しかるときはなら市中に不屆もの多あるときはみな奉行ゑあしき也わかとか也可恐可戒こと也

○廿日　晴　けふは學問所ゑ子供には蜜柑別段に召連出しもの共に山水花鳥の書畫二枚つゝを遣したり子供みなことによろこひしといふ也百人

はかりのものゝ大蜜柑七ッ宛遣したり其入用貳分ほとかゝりし也

○廿一日　くもり夜雨　けふはいなりまつり也赤飯八斗魚類壹兩み柑二分其外小買物あり與力其外ゝ赤飯を遣す赤飯を竹皮へつゝみ密柑一同參詣ゝものゝなけあたふる也いなりゝはみかけ燈籠一基奉納する是も先格也町人共御役所附ゝものより與力等迄いろ〳〵奉納あり與力は御膳をあくる也銘々の名札附あり酒は貳斗五升はかり所々ゟ上ル也夜五時頃まて參詣ありみかむを子供の給て皮をはもちかへる也一ッもすつることなしみなくすりやゝ持行といふ上方のものみなこの類也いなりへの備物は同心ゝ内懸ありて所務と成也大かた酒は開なるへしと同心のいなりの番する所ゝ侍の行しに茶の馳走になりあきれ歸れり酒はもとの酒やゝもて行錢にすると也いなりまつり六兩はかりかゝる也

○廿二日　雨　われ常にいふ近思錄は後世の論語なるへし貞觀政要は書經の遺風あるかことし小學はわか輩の守り本尊也日々よむへきの書也詩書は義の府也と左傳にもみえたり聖人のみち詩書にあるかことし別ゟ書の三謨の類いにしへのみちこれに存するかことくしらぬなからおもひてこの頃は書經を常にみる也小學は課の外にゟはしめに先よむ也けふも張觀か初ゟ登科し人に教へしにつとむるとつゝしむと和らくとゆるやか成との四ッを以せり實に謹勤和緩の四字はわれらか四字の護符也よく守れは災難消滅疑へからす其内可成につとむるほとの人勤の一字はあり和は少々は心かくるなれとも謹甚以かたくよく勤むるものほとかたく破れやすき也緩はゆるやかとよむ字也これ又勤めて且力ある人の多き病也既に緩の字は勤向に如何也と申せしに張觀色を正しくして何もそこもとに緩にして事に及はぬことを教ゆるにはあらすみよ世間のことみないそくにてあやまるといひしと也このことなとは又かたきか上のかたきにてわれらには何よりの針砭也

○廿三日　晴　この頃祭の日に市中の者つとひ來しなかに密に惣次郎か

みなし子をおもひ女の母か抱來りしと也女子にてよき子也と人のいふはまことか是はならの桶屋とやらむすまふとりの女とやらむ妊身せしもありしと兼ゐきゝしかそれなるへし惣次郎か墓に花のあけてあるはふしき也なと云しか夫なるへしはかあるといふも内々のことなるへし情死して死骸はとり捨になりしもの也可憎かきりの恩しらすなれときけは無益のなみた密におつる也惣次郎は八才の時よりそは遣のさむらひにして遣ひし故なるへし

○廿四日　晴　昨日より順右衞門悴痘瘡也此ころなら市中大流行にゐ世なみあしく既に一日に十余人は死亡有之候由ゑ處屋敷内には兒殊に多く候間大に恐れ居候處順右衞門悴至ゐかるしみな〳〵恐るゝ内に少々氣を直したり順右衞門悴よき男にゐけしからぬ利口ものなるへしとおもはるゝ大出來もの故別ゐ案し居候處此躰にゐは先安心也江戸にも孫等ゑ痘瘡いかに〳〵と殊におもひ煩ふ也痘瘡外の子供六人ありみな〳〵出精故子供殊に多き也

○廿五日　晴　十六日に清水領ゑもの同士にゐ婚禮の祝義の出しかたのことを村のわかきもの六ケ敷いひて大勢にゐ參りあはれ石を投たるをよめもらひしかたのものふせくとてあへなく若きものゝ頭取を打殺して其一件一昨日より吟味取懸る昨日五ツ時より牢屋敷にゐ與力同心共吟味して夜四ツ時まてかゝるけふ假口書にゐ二十五人出牢村預歸村せりこのほと與力共の出精大かた此類也勿論少もせたけたるにはあらす立會の家來歸り來りてけさ其旨をいひて驚て與力同心共をほめ遣したり○夜に入十四日出ゑ江戸狀相屆く先以母上樣段々と御はれもよろしく被爲入堀ゑ内等ゐ御出とゑ御事恐悦ゑ至夫婦の喜ひ此事にとゝまる扨又其外一同病人無之目出度候　御殿ゑ娘共ゟ日記來るおけいの文つらよくなりしは不思義也所々ゐ書狀を出す故なるへし新のりを被下候ゐ難有一枚直にやきて給たり京攝なとに淺草新のりありみな上かた近國にて近來製するもの也

初は贋物としらさりしか追々試るにかほり少して土地の人々のはなしに早くわるくなるといふ也のりは品川海内一なりさて所々の工なる又おもふへし○母上より御文難有拜見おさと手當々事毎度なから詳に御沙汰落涙仕候ゑ奉謝候おさとこゝろよくは相成候得共持病此ころは三十日のうちに三たひ起り世話をやき心配し行屆こと江戸よりも甚しこれ又病なるへし病みな氣より起るといふことを常にいひ聞すれと更に不用乍去母上の御文はおさとの難有かり且なき且尊ふ故何よりの藥なるへし○左助殿久々にゑ出府母上御逢被成御悅なるへししかし御意の如く中風の氣味故に西國行はいかゝと深くおもひ煩居候處江戸えののつもりと先以安心且御同意也○俊藏か方の少女を御ほめ被下候度々御ことつての趣いつも〳〵おさとよりみな〳〵に不洩爲申聞候一同御禮申上候事にゑ候少女ます〳〵奇也いなりまつりの活花の數品あるをみて其内に梅花水仙の出來ことにすくれたるよしを稱しけれは四才の女子故に聞居しもの驚たるよし也其翌日いなりまつり活はなの樣子等詳にかたる書か如くに說たり不思義なる少女也太郎なとは男子故却ゑ直にして簡なるかかた生立はよろしかるへし○新右衞門の日記ゑ内廿五日の雷ならも十月の雷日記に記せるかことし天地の氣可恐こと也○岡崎の刀工ほり物の上手道工やの恐るゝにいたる感歎也この人必義胤の類なるへし○拂物の天正祐定最上の出來無申分祐定中の隨一といふものならは十五兩にてもくるしからし及文等不十分ともきれ十分ならは劔行よろしく無疵のものならは七八兩は必あるへし此祐定と闘打ならては近く武士の佩刀とするもの少し必二十兩三十兩の刀にまさるへし是ならは命をかくへしとおもふ刀少もの也難得もの也新右衞門のさし料二尺四尺位の闘か備前刀二百七八十年前後のものにゑかつこうよろしくはこゝろかけ置てもよからむか今既に數刀あれは事はかゝす乍去わか兼元のことき望みに叶ひしものあらは一刀はありたしこれ至ゑ容易なるかことくにて決ゑなし心靜に穿鑿あるへし刀は授り物のことし

行光の淺右衞門話承知いたし候追ゝよくわかり候時にゝよろしあまりに無覺束こと也○返納金〻義に付中野ゝ御談〻上御取計御勘定所ゝ〻達御取計被下候よし乍例忝候御取計又御尤也○古助殿新右衞門方ゝ一夜御とまり段々〻御世話御尤也拙者も大慶○柔介こと諸般御尤也かれか妻は君子の評ある人物也みな妻より起ること也可歎○刀術の話至極の御事しかしやすみては何にても如斯日を刻し子共相手の六さい稽古くらゐは大に藥也按摩かはり也予棒をふることはしめ二十五本なりしか既に此ほとは百五十余に及へりこの躰にゝは來春は千本にいたるへし重きやりのかたは一昨日ゝ千本にいたれり此棒を用人か諸入用に記すに樫八角〻棒代七匁五分とあり大に笑ふ也人々わかことを叟父の妙達とて笑ふ也この頃

三千刀劔三千載早起操揮又據鞍要學華佗五禽戲休爲烈士暮年看

といふことを家來の早起といふ題にて詩を作りし故に予も又戲に題せし也家來は是はけしからぬ御作也とて大に笑ひし也

○廿六日　晴　春日まつりに付頭坊の田樂大宿所のかけとりといふことを初年は奉行の見置こと也御目付代なとにもみし人あり昨年は服穢に付不參當年は其ことなけれは行たり大宿所といふは春日願主人といふものゝ旅宿也願主人といふものはいにしへより大和に散在して百姓と神職とをかねしもの也いにしへは大和の武士なるへし今も奉行所にゝは上椽取扱のもの也春日のならゐ迂行のときの願主故願主人といふといふか實事はいまたしらす候旅宿といふ故に市中にはあれ共もとより別にそのために造りしもの也地面も下されしなるへしなら中にゝは目貫といふ地にゝ馬のるほとのあき地あり玄關はなし坐敷に太刀長刀甲冑箙胡籙太刀とて長八九尺のものなと多かさり左のかたに屋根を作り埒を結雉子兎狸をかけつらねたりよつてかけとりといふ也是はいにしへは願主人共か山野に獵してそれをこの通にかけ置て其内より春日の贄に奉りしものなるへし今も御祭には甲冑にて馬上也馬具其外御入用にゝ出來ることゝなり雉子狸等を

大宿所といふは御役所の書物に遍照院といふ寺跡を取立こしとあるはかとりにゝ其外留もなし書

郡中より爲出て夫を願主人共かよりて善惡を吟味する也給人立合也こゝに金房の長刀二十本はかりありとこの間に春日の若みやの神像かけありこれかの赤童子といふ御像也金太郎か棒を持て岩上に立るかことき物也こゝにて賄かたありて日々に料理出御祭畢ゟ酒宴あり夫に出る嶋臺等夥ありきこれに三百石を公儀より被下ある也奉行は毛氈の上に置き菓子と神酒肴なと出す也一寸したることなれ共其具みな古風也こゝより興福寺の地中頭坊ゟ參る田樂は庭上にてあり奉行〻見物所は長四疊にて高麗へりのたゝみやねは青竹とすき皮にゟ作り青き杉の皮を以柱もなにもみなつゝみたりしき居さへにつゝみあり全に關東にてのませかきといふものゝことく精靈棚に金屏風を立まはしたるもの也一獻二獻の度にしま臺出る也白きへキにて土器精進料理にて土器へそうめんをもりしなと全の精靈まつりに無紛よくいへは七五三ふるくいへは万葉のくゝ立の余風かもしるへからされ共何分に精靈流のもの也大根をさいの目にきさみ土器ゟ入たるなと可笑ほとまつこうくさし乍去もちへも盃臺のはなへも金はくを加へたるなと古風也一ッはも可食ものなし見しはかり也○右〻料理を下ゲて又人間の可食さけ幷飯等數品いづる味よき也汁つきのことき物に十德といふものあり湯とうのことくにて上につるあり唐めき風流なるもの也朱ぬり也古代の品は追々つきたり今もまゝ賣物につりはないけなとにせしをみしといひき奉行〻前にはみすを下ケ同心四人勤番せり正面はみすをまきて寺僧共左〻かたは衆徒共か棧敷也みなませかき也田樂は法師二人あとは惣髪也人品根來同心のことしはしめ本坐は東新座は西にならひ裝束わたしの式あり紅地のにしきの袍のことき物を着し烏帽子也（なしうち立かは）烏帽子を着せさるもあり二星古邦綾井なといふ曲あり酢薑膏藥煉といふ狂言あり全に猿樂の至ゟ下手なるもの也其風を今は學かことし祝言にいたりうたふ樣子はいにしへの田樂の余風存せるか猿樂と幸若の半ましりかことき物也ふるくは田樂は太神樂のことき伎ありて竹馬の一本なる

にのり一本あしの高き下駄をはき玉を飛し刀を投ることなと品々せしとみへ既に元祿の頃の春日祭の畫まき物には其圖ありしか今はみな出來ぬとみえて下駄と竹馬のことき物は畢にかた足かけしはかりにてまねこと計也一曲畢ることに例の長柄のかへにもちゆるてう子にゐ酒を遣し肴を遣す也半過ゐめしだしの式あり坐敷へあけて酒を給させて僧の老分ゑもの盃をくるゝ也其ときうたひをうたひて其坐にあるさかなみなとりもちて下る也さかなはくゝたちの類也田樂は庭上なれはみな沓をはく也中はに纏頭の式なるへし老分の僧袈裟を與ふる也是も眞のものにはあらすかりそめのもの也給仕の式子供みな大紋直垂也數十人みなしかり老分ゑものは衆徒ゑ内にもわたのかた衣のことき物を着せり是はいにしへ　天子より老分ゐ寒を凌ために賜ひし例也といふ今の天台眞言の縹冐子又しかりみな法衣にあらす別段のもの也こと畢ゐ田樂共二行に列坐して酒を庭上へそゝき酒にて手洗ひてまち居ると大なる白幣を新坐へ壹本本坐へ

酒を庭上へそゝくは灌の禮カ灌は黑きひの酒を地にそゝきて神おろしをする古禮也と覺へし也

一本ッゝ白衣ェリ立ノ僧出て一本ッゝわたす是は春日の御神ののらせ給ふといふ也是を田樂共樂をいたしなからもち行也この時は田樂みな畫あるあやいかさをかふれりこの白幣わたるときは庭上の前置の仕丁白てうを着烏帽子帶刀みな平服して坐敷に着坐の僧侶其外みな夥しく手をたゝくこと江戸の喧嘩の中直り天王さまのことしこれ周禮振動拜の注に今倭人拜以兩手相擊といひ其外かしはてのこと日本の古書にみえ膳夫村といふ今大和にあり膳夫臣のはすひといふ人みなかしはてとよむこれ君に膳奉るときにかしはてをする故也といふこと人のいひしをきゝしことありき振動拜のことは白石の調しことのありしと覺へし也この禮畢るころは既に黃昏に及へり田樂の半に嘉祥のまんちうほとのまんちうを庭へ立入見物の下人等へ投與ること夥しわかき女もあり中間躰のものもありみなうち混して拾ふさま田樂より興ありこのまんちうは予へも出せし也市三郎一口くつて吐弃たり鹽と小赤豆のかすを以造れるもの也以上のことみな昔興福寺か

三十万石も其余もとりし時の祭のさまの百分一を存せしなるへし予戯に
ならのことをこの頃

三萬人烟僧道商宜花宜月寧樂郷處々猶殘千歳寺空存泥塑法如亡

とわる口をいひし也けふの田樂かく黄昏までかゝるにはあらされ共衆徒
のうち服穢のことに付故障のことを出來遲くなりし也半にはあまりあくひ
をして待草臥けれは寺僧共氣のとくかりて既に徹せし酒肴を又改造りて
もてなせしにいたるわれ戯に

串〳〵と世話をやくのは味噌どこかこしようの附たる田樂の舞

といふにいたりし也春日のまつりよるとさはると酒と食ふことはかり也
人々笑ふ故に我云詩經にも祭のことをいひて神飲食をたしむといふこと
のありしと覺し齊人か祭舍に行てあまりもらひ一妻一妾を養ひしにても
祭は食物のこと也七月の盆の食物なと都ゐ年回等に其心あるへき事也

○廿七日　くもり　けふは春日之御祭禮に付徒五人侍五人にゐ對道具鑓
貳本伊達道具茶辨當等爲持出る例之通よやまかせ也足に七草を踏みな可
笑の至り也供立二町につゝくへし是も又絶倒乍去われいかなる生れい
かなる家筋にてかゝる行列なるやとおもへは勿躰なしみるもの山のこと
し其内を同心其外附添て下に〳〵也是又恐入たること也松の下といふ所
に至り御祭禮のこと去年の日記にて御承知なるへけれはしるさす候御祭
畢りゐ乘込馬九十五疋是は百姓らかさふらひ烏帽子素袍にていにしへの
大和士の躰にゐおもふまゝに馬を走らしめて行也あふなきの限也され共
少も怪我なしといふ持馬四十四疋是は藤堂家其外より出すかさり馬也柳
澤四十七疋藤堂十三疋片桐は一疋といふわけにゐ大和一國の大名軍役同
前に出すこと也みなかさり馬也馬面なとかけしもありし口とりはいつれ
も烏帽子白張也夫ゐ大太刀十中太刀十小太刀五十長刀拾願主人馬上にゐ
甲冑所々之大名鑓四百三十二本田樂法師等都ゐ二十一番例之通畢ゐ奉行
行列にゐ一之鳥居より長きみちをよやまかせにてねり行也其みちに一乘

大乘の兩御門跡其外わか與力家來或は御門跡方御家來末々までの棧敷あり關東のさしきとかはり青天井にゐ筵しきしはかり也奉行ゑ着坐といへ共高麗へりにゐ同心與力等羅列するはかり其余は同し今日は春日の御神は春日山の内廣き芝原ありて其内に小高き所に御假屋あり御屋根は松葉もてつくり御はしら其外共まつの皮附也其御左右に火焔太鼓の高サ二間余もあるへし見しこともなき大なるを二ツ並へて樂人か芝間に立て奏樂也風流なることいふへからす奉行は仕來にてかしこくも其御かりや近くまて乘輿下タニ〳〵にて參る大和一國の大名小名の家來みな平服前のやり其外垣のことくつらなりくしのことくならひてけしからぬはな〳〵しきことにゐ給人共附添下坐の家來を披露する也奉行乘輿の場を畢り下乘すると御役所附の社人貳人出迎ふ也夫ゟ奏樂はしまる奉行は貳間はかり歩行手水のうちに御かりやより十間余を隔てゝ高麗へりのたゝみ壹疊をしく也其上にて平服其内奏樂也右ゑ式をみむとて廣き芝間に諸家の家來ゟ寺社百姓町人等目もわたらぬほと並ひ居てみる也そこにて拜畢ゐ歸宅也奉行ゑ着服はのしめ麻也尤なること也樂人迄衣冠なれはそこへ赤とんほにては出られぬ也社人のうち壹人乘馬にて大政太臣の裝束也これは藤氏の御名代の例也といふ也けふの御祭猿樂の躰神子樂人らか馬上なるは關東の踊やたい馬鹿はやしの類にあらす願主人共けふ大宿所を出立にはみな居ならひて或は甲冑或はもみ烏帽子大紋にゐ嶋臺を並酒宴あり壹人出立ことにに謠曲をうたひ馬にのり段々筆下より馬にうちのり〳〵て出る過半出てのち物見の騎馬といふもの一騎乘切て出て半よりのり歸り時分はよしといふを相圖にてみな乘馬して御祭所に揃ふこれ例格也みな瓶子土器の酒もりにて前の躰にゐ謠曲をうたふ躰いつれも六七百年前の出陣なといふことはかくもあるらむとおもふはかり也といふ也けふは拜禮畢ゐ夫ゟ歸宅せしは七ツ半時過也奉行着坐は春日の山内土手の上に松の並木ある所に高麗へりのたゝみ二十八九疊三十疊余も敷わきに長刀を

置前に同心立番也與力倍從家内又同し

○廿八日　晴　御祭禮濟〻御神前能あり例〻通也けふもよやまかせ也か

こかき七くさなとをふみ犯人のことし輿中みるに不堪輿中にゐ詩一首を

賦す　寧樂吟

春日山邊三里閭人烟再熾筆荒墟言神言靈尊麋鹿爲綌爲絺裕市廬四月鵑

啼唯乾肉三秋鴈到漸鮮魚士人知否今時澤唱旧漫誇糟粕餘

少々風邪氣にゐ春日山中〻猿樂〻勤番いかにもさむし夕くれより例の通

まきを燒立る山かせにて火の子所々にとひちる二十間も其余もわきにて

よほとあたゝにて寒を忘れたり

庭火たきちらすほのふもみちはのにしきにまかふ神の弘前

なといひしか少々の風邪なから樂をみて居るはよき御科のこゝろしてく

るしけれは風邪のよしを以早く歸れり神前能のすみしは夜四ッ半也元來

能は奉行〻肩輿を棧敷へつくるを相圖にゐ衆徒神人等こと〳〵くに神前

へならふ也衆徒は袈裟をかふる也袈裟をかふれは畫かける辨慶の頭のこ

とく成也銘々刀脇差を帶して銀つくりの太刀を士にもたせて立なから見

物也寺僧も同しさまのものかふりて首は白き襟立ころもなり神人らはみ

な白張にて御かりやの陛上陛下に列居せり御かりやはまつの葉にてふき

黑木つくりとてみな丸木の削らぬにてつくる也古雅いふへからさること

也能のうちに第一とするは翁猿樂長權守也これは猿樂の元祖にて江戸の

觀世太夫はしめ翁三番叟をするはこの權守のなかれをくむこと也よつて

第一のものなれ共はつかの配當米にて株のうりかひに成もと〳〵百姓な

と兼職のものにゐ冠りも淨衣もなよひたるのかきりにて三番叟の素袍な

と破れたるも多し江戸の能とちかひて翁も三人三番叟も三人にて舞ふ也

つゝみの音なと春雨の軒の玉水よりもひくし

居候雨たれほとに戸をたゝき

と千柳かいひしは今少し音高かるへしつゝみの音の微なるもの勞瘵を煩

ふ狸ならすはこの長權守のつゝみなるへし乍去人なみに素袍のはたぬきて打也みな木綿の藍ひろうとの紋附也其余しるへし舞さま着類と伯仲せり畢ゐ全のさる樂はしまるこれは先々人間なみなれは別にいふへきこともなしこの權守といふもの寶生彌五郎を相手取候ゐ大炊頭殿寺社奉行のとき出入をして江戸拂に成しことありき其ころ申口ゑ躰にゐは彌五郎は才子筋の物のことくにいひき可笑こと也

○廿九日　くもり　けふみせ馬來る十六兩也といふ也馬具も賣物也と聞し也みせ馬の乘つかけといふものの袴携來りて百姓はくろうかのること也乍去聲なとをかけ事かましけなること也これ江戸の豊藏代次郎等のかはりなり風邪氣にて且みるへきこともあらねは不出市三郎は一くらのりしといふ也○きのふ御祭に付留役の瀧澤か方に居し士機嫌聞に來り民藏かたに止宿したりごまもろしこしの粉豆の粉を例ゑ通くれたりこの豆の粉といふものはつみ入にして汁とするもの也中々可食ものにあらす乍去かこの村に彌助すしといふ名物あり乍去百姓なりとの可食もの也とのにあらすとのて父は七十の老翁なれ共其味をしらすとい也上方の百姓に實に可尊こと也そなれ富にみて故に長くつゝく也

れは珍として來ることにくるゝ也民藏かたにはつみかさねて手をつけずありしか又けれたりとて民藏の妻仰天せしといふも奇也江戸に二年の住居して早く歸り農業出精してかゝるものうまかりて居る故也故に立派成百姓にゐ二百年も其余もつゝく也

○十二月朔日　くもり　けふ少々風邪に付月並の禮不受表ゐ不出巨燵にて書をよむ位のこと也昨日御祭の贄神人共ゑ來る當年は暖氣なれは狸兎ゑ類はみな蛆を生し臭氣堪へからすされ共藤堂和泉守所司代御城代等ゐは足輕使にてくはり末々は出入ゑものゐも遣す也とろけたるかことき雑子なとを緣をもとめて市中ゑものはもらひ行也與力ゐは雑子のひらきの馳走あり同心等迄ゐ遣す

○二日　くもり　風邪前に同し市三郎このほとひまに童蒙のみるへきためにに作れる義經記をよむ其内に義經かいせの三郎に逢條に手々に手鉾を

もちてといふことあり鵤鳥越かのうちに火矢をいかけてといふ條を疑ひて此武器この頃あるべきものかいかにとわれにとひしめつらしきこと也このほと大に出精する故なるへし

○三日　晴　風邪前に同し茶山か集を彰常か好みよみしをかり來れり不快中によみみるに岡本花亭の賞するも宜なりけりとおもふ也われいふ上手の詩歌は諸侯の燕享のことし臺所の音もせす至ゑ静にしてことなきかことくにてはしめに庭なとをみて先目をよろこはしめているうちに段々と食物の出るに其器より食物より新奇をきはめて目を驚し腹を飽しむれともいかにも造作もなきかことし下手はこれに反し臺所にてすりはちをすり七りんの下をたてよこ十文字にあふく音きこえ其躁夥しされ共出るものはみな新奇ならすこと足らねははいふきを一寸はし立にするかことく成にいたる故凡みる人みな胸をわるくする也可歎こと也といひき○けふめつらしく盆池の氷はりつめたりしかるに大木の楠の根の下自然にほれて洞のことなくなる所あり其前三四尺はかり氷なし水鳥みな夜其所にあつまりしとみえてをし鳥小かもみな栖をそこにうつせり狐いたちなとの少も行かれぬ所なり鳥すらかくの如し用心のなきもの鳥にも及はぬ人甚多しよつて自戒

○四日　晴　こゝろよし未明より起て書をよむ武藝はいまたせす白洲に出て公事を聞こと平日のことし

○五日　晴　寒氣再ひゆるむなら市中風邪多に被行乍去わか少々風邪はかり外にやめるものなしおさと先ッ健也只おそるゝは惣年寄の出立前也とていろ〳〵世話をして不相替都ゑ引受也追ゑいたみて被倒れては大變也市三郎出精也この日記をしるす四ッ半なるへしおさと火はちのわきにてかもをにる左衞門尉詩作の清書をしなから夫を食ふさけ小猪口に只五ッ也おさと二ッ一合の酒大にあまる市三郎いまた手習也殘物を遣すよく食すおり〳〵雪隱へ行大放屁雷のことしこれこの頃よりの躰也雨　御隱

居様ゑ内父上の御いひき乍恐市三郎の屁と聲を同しくす下女みな起つて針又髪をいふ

○六日　晴　けふ市三郎北のかたの池にてをしとりの遊ひ居るをみつけて押へたり羽をきりしとりなれは直におさえたり七八日失せしを得しとてみな喜ひさわく也屋敷外庭二千坪はかりもあれはかゝることもある也

○今夜は鴨なしよつて一合酒の沙汰もなし四半頃に書をよみてもちを給たりけふはよほとさむし○わか風邪にゐ寒中伺少々延引ゑ旨一乗院宮へ寒中伺として葛粉奉る使者ゑ序に爲申たるに宮の御案しにてけふ見て參れとて儒者育介を内々被遣たりよつていさゝかの風邪にゐ二日床を敷置しか夫も書をよむことなと常のことく只四ツをかきりに臥りしまてのことにてはや全快なれは明日は寒中に參　殿するよしを申上たり恐入たる御こと也

○七日　くもり　五時供揃にゐ一乗院大乗院へ寒中伺として參る兩宮共御風邪のよしにて御逢なし一乗院にゐ宸殿といふ所にゐ御菓子を被下大乗院にゐは一段高くしたる表の坐敷にゐ御酒を被下これみな先格也例の瓶子土器にて重箱に精進物禮を述て拜見するはかり也酒は粕くさき新酒也

○けふ小かもをもらひたりかもなむはむをこしらへたりそれに菜をいれたしとおさとのいひしにけんか前栽より多くつみ來れりおさとかこれは汝らか勞してつみしなれはあまりは給よといふ予戯に君のため冬のはたけに青菜つむなるへしなといふうちに与風おもひ出しはわか十歳はかりの時か一とせ十二月の末雪夥しく日をかさねてふりて正月の雜煮に遣ふ菜なし一たはにて百文也とふ泥みちをあるきて赤城町のいたみやまて買に行しに菜なし母上の思召つきにて湯をわかし積雪へかけて十能にて雪を穿はつかに青菜（アヲ）二ひらか三ひらとり出てそれを以用を辨せしことあり其時北おかちまちのうらの竹垣のもとにわれと母上の立しときのさむかりしこと其ときの母上の御顔の様子は今もなほわかこゝろにとゝまれり紺

しまの木綿の御召にてたすきをかけて、おはしまし當時のお千重よりも尙二ツはかりも御下なるへしと覺しア、われらか爲にいろ〳〵に御苦勞を遊はされしよ其ころ貧にてはあらさりしか下女もなくことたらぬことにていとかなし今は難有ことよと頻におもひ出て母上のことおもひ奉りて落涙數行に及へり夫におもへは今のありかたさいかにやあるらむと其こと市三郎らにいひ聞かせたり其こと今しるものは母上と予とにて少も僞なきことなれは第一に予らかいましめ次に新右衞門次に幸三郎さては孫子の爲とこゝに記す也

○八日　くもり　昨夜より寒殊に甚し盆池全に氷る辰刻三十一度也○御ことはしめ也こんにやくの外みな前栽のものにてすむ大根人參等豆腐のことくやはらか也○明長屋あり夫を與力らか申合て稽古場にして郡山より先生を呼て稽古をはしめて日ことに劔術の聲きこゆる也家來共に右之稽古場をのそき及ひ批判或はみたりに行て仕合をすへからす尤おとなしく弟子入をして遣ふことは勝手次第之旨を申渡たり○如生かもを貰ふ即坐に庖丁させたりよつて今日はねるとき至ゟ少なる猪口にて詩を吟しなから五ツ酒をのめりかもは豆腐とゝもに五さら計喫せりわか酒以前ならは必三合以上なるへきに今は五勺はかり也かはれはかはるもの也これ病をおそるゝによつて也かはるといへはかはれはかはるもの也與力らかさる樂劔術とかはるは淺くさの飛たりはねたりか四文よりもかはりし也乍去右に付一言も申せしことはなき也わか轉役してのちの人か又手をたゝきたらは又かはるへしよのなかは飛たりはねたりによく似たりわきの人の手のたゝき樣にていろ〳〵に變する也

○九日　晴　夜に入ゟ直胤來る同人京都の弟子のかたへしはらく居て又大坂ゟ行とて來りし也十歲前後の兒の足ほとなる銕を以造れる温石をくれり至ゟよろし熱してきれにつゝみ背中はら等ゟ當温めてはもむ也扁鵲か傳に熨といふことのありしかそれと暗に似たるものかとおもふ也

大に効あるものゝ如しわれ刀劔のはなしは大に嫌ひに成りて大和へ來りては如忘とおもひしか直胤來りて刀劔の利鈍を論し往古よりの刀匠らか巧拙を議して果てはとこの中にゐねなからに尙論つきすして夜八打はきゝしか後は話くたひれて臥候也直胤當年六十九老ゐます〳〵壯也刀一段見事に成たり京都にゐ助實の銘刀をみて与風工夫の附しことありて今まてのことを改て夫を學ふに大に得たることあり人は必すしも死に臨み息を引取まては工夫修行學問ありて上達するといひし曾子易牘のときの語に似たり直胤も二百年來指を屈する上工なるへしこゝろの用ひかた大儒のことしこの頃京都の尾崎か尾州のものか繼中心の銘人ありて直たね既に五十兩の相談をして大に欺られむとせしと也其躰銀むく金きせのはゝきにて菊きりの紋ちらしの彫あり白さやの至ゐふときに納めて其さや又ふるし古代のにしきの袋に入てふくろ所々破れたり外のけしき疑ふへくもあらす中心絶妙也夫にすかたよろしき刀をわさといなかときにして其

此刀みねと刄かたをよくみれは忽にわかるをあまりに外のよのきに欺れしといひき

拙を掩ひ繼目をはゝき下にしてそこのよこすしに埋かねと小さひを以隱せしものにゐ一通の眼の可及にあらすわれ既に七十也いかなる贋物也とも欺かるへきことはあらすとおもひしに後生可恐と舌を吐てかたりし也新右衞門幸三郎等刀に油斷あるへからす直胤も又かくのことき事に逢ふ也可恐の至りとしるす也直胤の筋骨の療治大に被行て屋敷外へ隨宜庵といふ庵をつくり夫ゐ來るものは鍛冶の余暇に療治してやることにて尤隱德のこゝろなれは一錢をも取らすしかるに日々に夥人來りて鍛冶のことに害する故に弟子に其庵を與て居らしめ難治の者のみを療するといひき

○十日　今曉微雪忽にはれて快晴也　直胤今日九ツ時頃よりふる市のかたより境へ行夫より大坂ゐ歸りて主用を兼て下の關ゐ行備前ゐ行備前刀の遺風をさくりて來年四月より五月頃に江戸へ歸る也又正月の末頃にはなしに來るへしといひて忽に歸れりよほとこゝろの修行出來し翁也弟子二人をつれて立派なる風俗にてかこにのり歩行也天下に借金なく囊中百

金に及ふ金の絶ることなく衣食のこと計らすして暖飽せりこれ先師水心子か教を專に守り段々と修行する御かけ也なといひし也

○十一日　くもり　御用日白洲ゟ出る風邪ことに行はる○俊藏かかたの少女をそめか抱寢して夜半にわれはシイに行來る也とて行て歸りしにいねすしてまち居てヲッカサンこれにてはとて

長〳〵シイをひとりかもねむ

といひしよし也俊藏夫婦大に驚歎せしと也シイのショの秀句なるほとにはあらすとも長きよをまつの意は十二分にわかれり眞に奇才也四才の少女あやしといふへしこの少女常に十二三才の少女の才あり取次なとをするに少も不違といふ也穢多の來りしを穢多の來しといひしかは左はいふへからすといひしに然らはのちは穢多といはじ御出入か參りしと可言といひしか其後穢多の來りしといふことなしと也穢多は革製作のことにてしは〳〵俊藏方ゟ來る也○ならのこと母をおもひ故郷の情は夢しはしいつか忘るへきしかしそれはこれいひても仕かたなけれはいはす其外は書をよむことも成り外に患ることとなし味爽より夜九ッ前までは少もひまなく少々宛の心の養ひも出來てそれは苦中の樂なるへき也只可歎は江戸にては天下の人の輻湊する地なれは多く豪傑に逢ひて身の及はさるをはちて修行のひとつとも成るにならには其こと絶てならす直胤かことき物來り一夕はなしても志を立る助をは大にする也これ可歎こと也江戸ならてはこのことならぬ也佐藤一齋翁のこときはいふに及はす江戸にて聞へし人はみな万人にすくれし人々はいふに及はす中には世々得かたき人多くある也又無藝無學の人のうちよりも故郷を捨江戸へ來りて少し成とも身を立るものは其故郷を捨て江戸へ出るといふ志はや其郷里の人々よりはすくれたることあるものなれは並々の人千万人にはすきたる人々也まして夫よりもまさりたる人々をや書の胤征に工執藝事以諫といふことあり伎藝は小事の極なれ共一伎一藝なりとも世の人に稱せらるゝ人は其一藝に

おゐてはおのつから聖賢の道にひとしく可採用こと多しよつて聖人のみちにかゝることもありしなるへし堯舜の道の人にとりて善をするの一事胤正の語を以もみるへし昔惺窩先生明へ行て學問せむとて暴風に逢ひて途中より歸られ六經の日本にある上は何をか異朝に求むへしとて終に行れすして大日本學問のみちと宗となられ菅相公の晩唐の學問みるに足らすとて遣唐使の命かふふり給ひて終に渡唐し給はすして千載文學の聖廟とあふかれ給ふなれは聖賢はみつから守りみつからみかきて十分なれ共其以下は豪傑に逢はすしては志を立るに損多し故に士に四方の志或は友に從て志をみるなといふこと禮記にも載られしなるへし新右衞門幸三郎等今江戸にありて人に交はるいかなる人なりとも必敬して其志をみて自ラの益となし給ふへしわれ今田舍にて人に交ること少してはしめて江戸にありしとき人に交りかたのよからぬことの夥しき万か一をしりてこゝに記す人を敬するは卽己か敬也敬のこと徹上徹下の敎也徂徠翁なとは宋儒を破られて尤なることも多かれともこの敬を以徹上徹下の敎とする宋儒の敎こそ可尊のかきり身の規矩準繩也

○十二日　晴　きのふ夕かた十一月廿六日附之書狀到來先以母上樣御機嫌よく恐悅之至其外御一同御別條なくと之御事目出度候藤左衞門方にゐよめ安產男子出生殊に大丈夫と之事目出度候新右衞門之家之はつ孫にゐ男子故歡ひ察し入候實は女子ならはわか孫よめと兼ゐこゝろ定置しところ女子ならすしてわれは少々勘定違ひ候兩ッなからよき樣には參らもの(ぬ脫カ)に候人はいろ〳〵心々の欲と大笑いたし申候○母上樣之御書狀追々御不快も御快と之御事恐悅之至に御座候此上ともよく御養生被遊候樣奉存候太郎丈夫と之義段々之御手入故と奉存候俊藏方之少女同年故にかれより、たけ高からむやいかにやなと折々おもひ出候事に御座候○新右衞門日記にゐ藝州之出火　姫君樣無御別條御立退相濟候由其外之義とも詳に承知おさとなと驚歎前後を失ひ候はかり恐入候乍去怪我人等末々迄も無之と

〻義先以恐悦〻御事也○水野侍從〻御不快此節〻躰いかにも御心からとは乍申御氣〻毒の御事也○新右衞門兒孫出生に付天授のほと難有右に付別ゟ三省して御つゝしみ被成候と〻御事何より〻御事に御座候○聞流しの皮羽織歎息ごと〳〵くに推察〻通也○幸三郎より〻書狀左助殿西國ゟ被參候義御案事被成候ゟ新右衞門一同御差止候得共承知不被在候由拙者よりも御とめ申候書狀先達ゟ差出候義に御座候乍去御出生國故立歸りならは是も又無御余義筋と奉存候也○鑓〻義可相成は金房〻方へいたし度候いそきはいたし不申候○里見源左衞門等先支配小普請方〻ものに逢被申候はゝよろしく御たのみ申候

○十三日　晴　すゝ拂の祝義あり與力同心に酒肴粥等遣す其余江戸の如し○すゝ拂にも段々ありわか十五六歳の時は友野先生の方ゟ被雇て帋袋なとかふりてはたらきたり宅にてすゝ拂のことといふに不及夫より身分段々結構になりて今は用人等も悉は働はせすとし男ありて壹人はのしめ麻上下にて其ことに預る也なやらひなと又しかりはしめは予豆をまきし也夫ゟ中間にまかせさふらひにまかせ用人にまかせはしめは何も不遣さりしかなやらひする中間に錢五十文遣せしかはしめにて今はなやらひする用人に目錄遣すことくに成し也以前は民藏のもちなりしかことしは民藏の願にて用人三人かはる〳〵するこに成れりこれみな　公儀の御恩にて且御先祖御兩親の御余德によるもの也難有事也このことをおもへは常に何のあしきこゝろもあらぬ筈なれともさもあらぬは予は眞の小人なるへしなれ共嘗膽薪にふしてもこの小人の敵をは亡してわかこゝろをしてわか一軀内に王たらしめむとおもふ也○すゝ拂もわかきものはさわきの一ツにて女共はとをあけうたうたふか一ッの喜也父上既に七十にならせられともこの興いまたあらせられて昨夜よりわか上へきる單物はいつれもゝ引よかふりものよとて昨夜臥せられ給ふころ母上を御せめなされて一にきやかくありしかけふもとくより若侍らともにトンハタの御世話也

老てます〳〵壯なる御事也これらはトヽサンノザコましりの類なるへし母上こゝとを仰らるゝは左衞門にかくれ居て江戸にては火事に行ンと欲し人のかたのすゝ拂の手傳に行ならへ來りてもなほすゝ拂の手傳をはすてす不思義なる御本生也と仰られき老てます〳〵鑠なるは恐悅の御事也

○十四日　晴　三十三度のさむさ也ならへ來りてはしめて也○けふ密夫を殺せし一件にゐ女を呼出すいか成美人かとおもひしにならにはめつらしき醜婦にゐゆづもてつくれるちむにつふらなる眼つけたるかことき四十三歳の女也これにて人一人死せしやと大に感ありて白洲より歸りおさとか前ゐ行膝行頓首してしは〳〵うやまひたりおさと大に驚てこは狂氣ばしし給ひしかといふ故にいや〳〵なか〳〵左にあらす實はけふかく〳〵の次第なりかゝる女にいのちすつるものもあるかとおもへは今まてわかばゝのまむちうの干ものまくろのすきみなといひしはいともかしこくあらありかたやなもつたいなやと天にも地にもあらすかゝをたうとく

おもへはかくうやまふなりといひしにみな飯をふきたり○ことしもたゝみ替をやめて夫たけを同心其外輕きもの共の手當とせり與力共よりいかにもきたなく破たらむ所もあるへしとて强ゐたゝみ替せむとてきかぬ故にわか入用を以するならは吝ともいふへし　公義御入用の事故に居間なと破たるとも何のことかあらむ輕きものらかためになれはそれこそわか喜ふ所也といひてたゝみ丈の代料を少々御益をつけて殘りは出精のものへ遣したり

○十五日　晴　月並の禮受ること例のことし御役宅内の明長屋あり與力の筆頭考にゐ郡山より劔術遣ひを呼ひ近頃右ゑ長屋にゐ六度ツヽ月々稽古ありわかきもの共みな稽古する也家來共末々迄に申付右ゑ劔術の弟子可成は勝手次第のそき或は批判することは決ゐあるへからすと申渡置たりけふは夕かたに馬場より右ゑ稽古場ゐ行たり稽古場ひらき也とて右を祝し大鯛一枚に酒三升みかむ一籠を遣したり形をみるに一刀流也仕合を

好みしに鋏ひこ涎かけある面にゐ眞神かけのことときしなひ故にいかゝと其躰をみしに近く仕合をつけしものとみえて至ゐ穩成もの也ひうちといふ也たかひにたゝき合ふ也せいかむにはとらすはつそうより打出しやつといひてしなひを合せていかにもあやしき勝負也定ゐ名人のわさなるへし空鈍流の一雲かいふ相拔なといふにも近かるへし眞影流なとには何分了解しかぬる也され共わか十年も附居るへきにもあらす一日なりともよきなくさみするはよきことにて卽わか　上ゐゑ御奉公の一ッなれはいたく感服して歸りたりわれかくのことくなれはそしる家來壹人もなし右ゑわけ故に近頃はたれも猿樂するもの壹人もなしこれに付ゐはわさと少も世話をせすしかしみなかくの如しよき諂諛也末長くつゝかせたきもの也

○十六日　晴　庭のあひる池をあらし且をし鳥とならひ栖せむも便なしと庭のうちにむかし池田かつくり置し生洲ありそのまはりをかこひてあひるを置しに段々と死ぬる也よく〳〵考ふるところ廣き所に置しと同しことに餌をやる故なるへしとおもひて圍をとりはらひてこゝろのまゝならしめ餌を減せしにやめるも勢を得たるかことしこれを以人は養生にて夭壽あり且身を動かさす美食をするものみな病を得るなるへきことこのあひると同し伯牛の病に命なるかなとみえ顏回に不幸短命とありこれみな天命をよく全せしにて其人々の短かくせしにはあらす人は仙人になりたしとの藥もとめむはもとよりあやまりにて長壽せむといろ〳〵するも得たりとはいひかたけれといかにもつゝしみて欲をすくなくして天命たけは全せねはならぬ也天命を全せぬといふは壽命を欲よりみちかくし法師の子のなき器用の人の不精なとの類いくらもあるへし此ほと市三郎ことの外出精してあさは一番からす夜は四ッ半位にてときにより予のかた市三郎の出精にまけることありされ共不器用にて達ゐ上達遲しよつて予いふ汝か今のことくならぬにはたとひ無筆なりとも天に對して申わけあり所謂命をつくすといふものなるへし不器用は天也不出精は人也人事をつ

くす上は少もうらみなしといひ聞せし也

○十八日（本ノマヽ）　くもり又雨　御用日白洲ゟ出るけふ兼ゟたのみ置候方より大鳥のうりもの來る眞の丹頂にて大也よつてそれ江戸ゟ之したくよとてさわき立しに足何分かたしよつて詳に聞は廿日已來に得たりしといふ大に望を失ひて返したり尙あとをたのみ置ぬ貳分貳朱也かもの十羽かけもあるへしやすきもの也

○十七日（本ノマヽ）　晴　少々風邪なりおさといふかゝるときはこしにこりありとよつてもませみるに果してしかりこしより胸まて筋はりて甚いたしもみほくしてこしの筋へはりを打しにこり其外共雪へ湯をそゝくか如くに治して平日の如しおさとの奇術みな〳〵驚歎せり

○十九日　昨夜より大雨けふはくもり又雨　寒氣大にゆるみ申候○昨日人より望まれ候ゟ筆にこまり新右衞門工夫之由にゟ昨年おさとへ被贈候筆を遣ひみし所至ゟよろしおさとへの贈故和筆風かと存候處存外唐筆風にて以前わたりの玉立氷清なと可申風の筆にゟ絶妙也しかしよほと高直の筆なるへしはしめは壹本壹匁もすへしなとおもひ居しか中々良筆の躰三四匁以上之筆なるへしとおもひぬよつて昨年もらひし五本の筆いまた一向に不遣貯置候分みなわか方ゟ引あけたり何卒あの通にゟたにさくなとしたゝめ候樣之上出來之筆全のこゝろみに一對御もらひ申度候何分にも靜晨堂は上工也尤昨夜は唐帋ゟ認候へ共たにさくには今少しやはらかにて風雅に出來候よりも奇麗に出來候かた書躰よろしく候間其御含にゟ御申付先ッ一對爲御造可被下候詩作なと認候には頂戴の筆を用ひ申候昨夜も唐帋十枚はかり被賴ものを認候ゟ感心いたし申候筆ちと剛きかた故惡筆にも少々遒勁之やうなるもの出來候よろしく候たにさくはよほと柔ならすは却ゟあしかるへきかに候

○廿日　くもり或はあられさむし　けふは又人に乞はれて夜に入唐帋へ十枚はかり詩又は畫の讃語又はうたなとしるす例の新右衞門かおくりし

筆を用ゆ眞に絶妙也かゝること畫はしるさすこれはなくさみに日をくらすといふこゝろ也

○廿一日　くもり　けふはもちつき也ならにて三味線太鼓なとにてうたひ大にきやかのもちつきのよし奉行所にゐはさすか鳴物はなし乍去うたをうたひいせ音トなとけしからぬさわき也こねとりのものみこぼう木のやうなるものにゐ水をうち三尺はかり成棒を以おもしろくこねとりをする也至ゐ手奇麗也おさといふ手を以せぬ故に奇麗をよろこひ居しに小便に行て手もあらはすふんとしをいちりなからいろ〳〵のことするさてもいや也といひきすき見の出來るやうにすたれをかけ置也兩御隱居樣なと御すき見也おさとは今曉より例のけろ〳〵にてねなから世話をする也當年は御祭或はもちつきなといふことき日に多く起る也當惑のいたり也○此ほとまてに順右衞門忰疱瘡四郎娘同斷貞助忰同斷順右衞門忰は顏に三十はかり也四郎娘は夫よりは少々多し貞助忰は顏に五ッはかり出來たり此上順作俊藏方いかゝなるへきや昔より奉行所にゐ重き疱瘡は曾ゐなしとていしやなと奉行所ゑ痘瘡をは至ゐこゝろやすくいふ也これは江戸の孫共も其列へ加へ度もの也つるをあつらへ置たりし所ゟけふ來るいかにせしとりかふるとりにて至ゐやせたりけふも又便に間にあはす廿四日まては飛脚もあれ共其後はなく春はもち申間敷とこれも進獻鶴のうち故いろ〳〵と申遣し置候

○廿二日　くもり又雨　昨夜御用狀來る母上樣御機嫌克其外御一同御無異ゑ由安心所々よりの書狀いつれも健なるとゑ事よろこひ無此上候おけいゟゑ文通に　千姫君樣琴井の娘とゑ御沙汰にゐ御懇ゑ御意等有之候由申來る

○廿三日　晴　至ゐあたゝか也五十三度余にいたるよる通鑑をよみ玄宗紀にいたる感ありて詩を賦す

曾戮牝雞威武楊又焚珠玉政綱張驕奢忽惑娥眉魔憒々終爲罔念狂

祿山兵氣壓京城二十四縣倒屐迎怨殺昇平無事日明皇不識有眞卿

これも平仄其外の相違あるもしらすこの前に記せしをあとにていろ〳〵直すによりてみれは平仄等大に相違せりこれ中絶其上卽吟を記す故なるへし○佐久間修理かたへ孟子のうち孟子の辯を好むの故かちと可疑ことのありしを三ケ條はかり記し遣したりしに其答來る其内司馬温公の孟子を疑れしケ條なと書拔きたる新奇なる說也おもふはみな博く書をよまさるよりの愆也後世の人なと古人のこゝろつかぬことをいふへきことはなき也多くはしらぬか盜みとりて己か說とする也

○廿四日　くもり　至ゐ暖氣也このほと年始狀歲暮の呈書なといふ故にはるはとなりに來にけりとおもふはかり遠國はものさひしものにていまに門にとしのくれ竹はるをまつ其しるしたてゝ漸くれめく位のこと也

○廿五日　昨夜雨ふりしか深夜に雪と成しとみえて今曉例ゑ壹本貳本の頃はあり明の月と共にまつ白也五頃より雪やみたり乍去あたゝか故に雪さつ〳〵ときゆる也朝めし前にかさをさして庭の築山より馬場のあたりへ出夫ゟいなりの山へのほりてみしにいこま山三笠山さを山春日山わかくさ山の雪けしきよし晴むとして同雲の覆ひかゝれるなといふへからさるけしき也ならは雪月花共によき所也乍去雪は月花のことくにはなし雪はわか宅の二階のかたなし

○廿六日　晴　三十度のさむさ也池は厚氷也南都へ來り初ゐのさむさ也

○きのふは與力の筆頭幷二老へ酒給させ其外西洋の木綿一反ッゝを遣す○けふ孫子虛實篇の守りて而必固きものは其攻さる所を守れはなりといふにいたりて歎息しけるは士は朝に入てそねまるゝといふことは千年前の唐も今の日のもとも同しこと也しかれは役人のはかねをならす人々は朝夕に攻らるゝ人也よつて守りよくなくてはならす其よく守といふは人の見もせす聞もせすといふこと其外何のこゝろおかれぬ下人又は表役人等へ突合によく愼て突合へき也これ不攻ところを守のわけ也それに人みせ

のみにかゝり居る人は敵の攻るところのみに心をかくる故にもしからめてより人をやりて攻ときは忽に落城也其つゝしみといふは大なる事にあらす至ゐはつかのうちにこもる也大造成事はたれもするなれ共小事はみつから欺て大敗軍の種を蒔也可恐事也たとへは上を敬し下に向ひて慎むは役人の城郭也其城郭を攻らるゝものかみつから破るといふことあるましき事也この心を己か爲によくつくせは顔回の非禮には視も聽もせすといふも中庸の戒慎恐懼もおのつから出來るか也これは上帝汝にのそめりと書經にいひしことをおもひ合せねは守られかたき也役人の仕損し衆人のみる前にてのことは差扣位のこと也内々のことは御預ケにも御役御免にもいたるへし可恐可慎

○廿七日　くもり　三十度のさむさ也當年もなら市中の貧人ゐ自分入用を以施しをいたす十七八人ありといふいかにも少成丈多しらへよとて再調にせしに十人はかりましたりいまた不分明のものもあるといふ故に賞の可疑は重くせよといふならすやましてわか入用を以施すこと也何かはくるしかるへし可疑はみな加へよとて加へて一人に付錢壹貫五百文ッゝ遣したり

○廿八日　晴　寒大にゆるむ四十二度也氷なし大書院にゐ歳暮ゑ禮をうくる

○廿九日　晴　泉水の氷きえて春のみとりを迎ふるにさも似たりいこま山なと霞めきたりけふ困窮人ゐゑ施し奉行ゑ手もと金を以することなれは勝手の方へ米錢をつむてわたすへしやなといふ故に　公儀より御めくみあるへきわけなれと御役所に金なけれはわか手もとよりすること也もし夫を私惠と混しては以ゑ外にて奉行ゑめくみとおもひては　上ゐ對し恐入たること也矢張白洲にて被下へし金子の出かたはわれと與力とのうち〳〵のこと也とて白洲にゐ申渡し訴所にゐわたし遣したり○このほと年始狀をかくによつて其さまを

殘暦纔餘一二晨公廳事少旅情頻閑中有劇新年牘筆走千門萬戸春

○晦日　はれ　暖氣にて大にはるめきたりけふは御役所もひる引にて用事なし表にはあれとも奥には年の暮の賀として來るものなければ至ゐ静也午去少々ッヽおさとか世話する位のことはある也元日の萬歳より藤堂家の古市奉行へ仕來にゐさかな三種にゐ酒を出すあるは三日の謠初の時の獻立なと用人の申出るといふ位のこと也正月奥にて酒給るものは醫師壹人也右ゑわけ故に今朝もやりのすこきいたし夫ゟ市三郎に刀術遣ひ遣したり夕かた書物を敎吳よといふ故に大晦日の夕かたゟ三ケ日の内はさらひはかりにしてくれよとたのしみしも大笑也

ゆめの間によせてはかへるとしなみの又もこゆるか末の松山

おとろふることしあらすはしく〳〵によるとしなみもいとはさらましかめにさす梅もかをりて一よさのはるの隔をしらせかほなる

こむはるのまうけのことのかはれるにふるさとしのふとしのくれかな

友ちとりわかのうらわに打むれてよるとしなみに千世遊はまし

ことしも與力共出精にゐ御用弁よし宇舍人十二人ならてはなし其内にも在宇居越御下知無之無據入宇もの七人ありて吟味不決ものは五人也

勉職微殘獄旅情聊解顰分金褒小吏散米賑貧民疾愈家無藥祿豐庖有醇送迎新故歳醉臥待春臻褒小吏

當年も手もとのことをつめ同心共へ施したり賑貧民は前にある米のかはりに錢を遣したる也疾愈は家來其外に病人ありしかみなけふはよろし庖有醇は」ならは何事も酒にゐくれには酒多き也少々は酒屋へあつけ置にいたる也醉臥は」歳暮に付けふは一合五勺はかりのめりかく記せしかおさとに聞に兩御隱居様にゐ三ッおさと市三郎にゐ三ッ小猪口故漸一合なるへしと也

川路聖謨文書第三
非賣品

昭和八年七月二十日印刷
昭和八年七月廿五日發行

東京市杉並區高圓寺二丁目四百十八番地
編輯者　大塚武松
東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者
發行者　早川良吉
東京市京橋區湊町三丁目八番地一
印刷者　高橋赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所　日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

不許複製